

【閲覧禁止】黄褐のカリグラ

葵尋人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

在り得ない時空。存在しなかった出会い。

正しき世界で、黄金の雷に圧倒的敗北を喫した黄褐の子。

自らの生すら胡乱な薄弱な女。

これは、エリート未満の魔物の子と、人間未満の人間の出会いの物語。

※金色のガツシュ!!の二次創作です。エリートことエシユロスが主人公ですが、オリ設定を多分に含み、所謂U-1と化しております。その場のノリと自己解釈で突っ走ります。既存の呪文にも自己解釈と改変が多分に含まみますのでご注意下さい。

Arcadia様にも投稿中です。

目次

LEVEL 1 : 邂逅	1
LEVEL 2 : 震え笑う女	8
LEVEL 3 : 哭く少年	15
LEVEL 4 : エリート魔物	23
LEVEL 5 : 運と、君の優秀さ	31
LEVEL 6 : 呪われなくとも穴二つ	38
LEVEL 7 : 大事に思ってくれる人	50
幕間	62
LEVEL 8 : タタリ神く愛情たつぷり幸せご飯	67
LEVEL 9 : 薫の料理	79
LEVEL 10 : 魔物少年エシユ☆お兄ちゃんー叛逆の物語ー【前篇】	91
99	
LEVEL 11 : 魔法少年エシユ☆兄ちゃんく叛逆の物語【後篇】	
幕間 2 天使の塵とニムロド	110

LEVEL 1：邂逅

——カリグラ家の男子たるもの淑女（レディ）には優しくするものだ。

——カリグラ家再興の為だ。誰であっても利用しろ。そして『神の試練』を勝ち抜くのだ。

幼い頃から背反する教育を受けてきた。

黄褐色の表紙をしたずっしりとした重みを感じる程分厚い本をいざ手に取って、少年はそのように述懐した。

そして、再び少年は顎に手を当てて考える。

日々の弛まぬ努力と、絶対的な己の才気によって次期王を決める戦いの百人の候補者に選ばれた……までは良い。

問題はこの戦いで何方を優先させるかだ。

少年が生まれた家の第一の教え。『男子、淑女を貶めるべからず』

……少年はこれが好きだった。女性は自分達、男とは違う。あれは華だ、宝石だ。穢れざるべき、不可侵の絶対聖域だ。其処にいるだけで心が豊かになる。依って、少年としては家訓を大事にしたい気持ちが強い。

併し、この戦いに少年の家の行く末が決まっているのも事実だ。少年はカリグラの屋敷の廊下を歩く。如何にも艶やかな赤い絨毯、見る者の心を掴んで離さない素晴らしい絵画の数々、並び立つ騎士甲冑。少年は歩いているだけで目にするそれらを誇らしく思った。だが、これらは総て虚栄だ。ただ煌びやかなだけの泡沫だ。いつ、若しかしたら、明日総て無くなってもおかしくはない。現に、少年は知っている。一つずつ、我が家から宝の一つ一つが無くなっているのを。これらを失わない為にも、自分は必ず勝ち抜いて王にならねばならない。ならば、手段など選んでいない場合ではないとも思う。

さあ、一体何方を取るべきか。

悩んで、悩んで、悩み抜いて……。

併し、答えは出ないまま。呆つとして、頭が熱い。

自分の部屋へと戻り、窓を開け、夜風を浴びてみても、尚脳の火照

りは止むことを知らない。

そうこうしている内に、蒼い空がどんどん白んできて、曙が少年に旅立ちの時を告げる。

結局答えは出ない儘――。

少年は首を鳴らし、思い切り肩を伸ばした。そして、洗面所で顔を洗い、いつも通りにブロンドの髪を整え、本だけ持って、自分の学校へと向かう。一応、『神の試練』には武器の持ち込みも許されているが、少年は剣術や棒術が別段に得意というわけでもない。寧ろ、下手に動きを鈍らせるものを持つくらいなら徒手空拳の方が良い。其方の戦闘術にはそこそこ覚えがある。

渺と、風が嘶いた。

少年は咄嗟に髪を押さえつけた。

――チツ。

気が付かぬままに、舌を打っていたので少年はおやと、首を傾げた。折角整えた髪が乱れてしまうことに対する苛立ちだろうか？ いや、屹度違う。考えが纏まらなかった所為だ。

……――まあ、良い。向こうに行ってから、すぐパートナーを見つけられる訳じゃあないんだ。まだ時間はある。ゆっくり考えれば良い。

……――それより、俺が降りる場所は何処だったか。確か、パートナーと縁のある場所に降りることになっていたか。

……――「キューバ」。確かそんな名前だったような気がする。

そんなことを考えていると、何時の間にか、学校に到着していた。

†

ピンチ、ピンチ、ピンチ……。

嗚呼。ピンチ、あなピンチ。

夜の街、ひび割れが目立つ煉瓦梁の通りを疾走する女の頭の中には『ピンチ』という単語しか存在していない。

一体、人生の中でピンチになったことがどれほどあっただろうか？ 小学三年生の夏休み、絵画の宿題を最終日の夜になって漸く思い出した時。十八歳のセフレに逃げられた寂しい冬の日、うっかり街角で

ジャックナイフを買って、その所為で電気代が払えなくなった瞬間。成程、女の人生二十四年、ピンチと言える瞬間は思い当たるだけでもかなりあったわけだ。

だが、それでも女は思う。今日こそ、本当に本当の、〃ピンチ〃である。

走りながら、自分の履いているスカートの丈が長いことを忌々しく思いながら、一寸後ろを振り向く。

男が八名。此方を追ってくる。全員が黒檀の肌をしている。そこに問題は無い。女がいるのはキューバだ。女のような黄色人種（モンゴロイド）を見つける方が難しいだろう。問題は彼等の格好だ。全員が全員、腕や顔に刺青、耳や唇にピアスと如何にも不良少年風である。そして、手に持っているものはバッドやナイフ、拳銃に、果ては自動小銃。その形相で見取れるのは怒り。更には現地語で、

「待てや、アバズレエ！」

「ぶち殺してやる！」

などと叫んでいる始末。

語るに及ばず、殺る気である。

———というか、何故さつきから道行く人誰も警察に通報しないのだろうか？ 日常茶飯事だから？

途轍もない危機故か。女の中に寧ろ、呑気な考えが生まれる。

だが、呑気な考えならば事態が呑気な方向に転ずるということは在り得ず、女は苦肉の策で路地裏に逃げ込んだ。

矢張り、追いかけてくる男たち。一体いつまで逃げれば良いのだろうか？

そんな疑問を抱きながら、女は足と腕を動かし続けたが、その答えは直ぐに見つかった。

自分が向かっていた先が袋小路だったからだ。

「あ、まずい」

自然とそんな声が漏れていた。

壁を背にギリギリまで逃げるがそんなことは意味を成さないだろう。

男たちが徐々に、徐々にとにじり寄ってくる。

男の一人が、バットを振り下ろしてきた。

「死ぬ……」

女は目を閉じた。確実に、頭に当たる。頭がかち割れて、死ぬ。そう思つて。

だが、待てども待てども、痛みが現れなかった。

——あれ？ 死ぬときでも、痛みは、ある筈なんだよね？

自問するが、その答えは自分にすら存在しない。死んだ経験など無いのだから。いや、自分にそういう概念があるのすら女には疑問だった。

若しかしたら、トンネルを抜ければ雪国であるかのように、目を開ければあの世ということもあるのかもしれないと、漸く目を開けると――。

「綺麗……」

女は知らず知らずのうちにそう呟く結果と相成った。

一点の汚れすら存在しない白い肌、よく手入れされたブロンドの髪、空を思わせる澄んだ碧眼。女は感嘆した、目の前に現れた少年の美しさに。

——日本であれば小学校の高学年になろうかというくらいの年齢に見えた。

肌触りが良さそうな乳白色のYシャツに、駱駝色の質の良さそうなフェルトで作られたハーフパンツ、本物の金と思しきものでエンブレムがされた白のハイソックスとその恰好にどこか育ちの良さを感じさせる。

女は俄かには信じられなかった。この育ちの良さそうな少年に、自分が助けられたことを。

だが、現に少年が男の振り下ろしたバットの先端を片手で掴んでいる様子を見るに、それは確かなことであった。

「二人の女性に大の男が寄って集って武器まで持って……」

少年がはあと、嘆息交じりに言葉を吐きながら、なんとバットの先端を握りつぶした。

丁度、力のある男が林檎を素手で割るあの感覚に近いだろうか。それほどに、簡単に、何でもないかのように。

男たちからは悲鳴が上がった。

「人間は下等だと聞いてはいたが……。ここまで下等だとは……」

そう揶揄するような、あきれ果てたような口調で言い放つと今度は、男の顔に裏拳を入れた。

たった、それだけのことだというのに。

虞——！

男の顔はスレッジハンマーで叩かれたかのようにひしやげる。

濤——！

威力によつて体ごと近くの建物の壁に打ち付けられた。

「見下げる、とことん見下げるぜ、人間」

吐き捨てながら、さも億劫そうに少年は肩を鳴らした。

一体、彼は何者なのだろうか？

そんなことを思っていると今度は少年が自分の前に跪いていた。

「怪我は？」

「……ない、です」

プライベートでは滅多に使わない丁寧語が自然と口に出ていた。

人生で男性に、跪かれる経験が無い為に恐縮してしまったのだ。

そんなぎこちのない様にも、けれど少年は微笑んだ。心の底から安

堵したと言わんばかりに。

「えっと……アナタは……」

「俺……いえ私はエシユロス」

少年は胸に手を当て、自分を示した。

——名前を聞いたわけじゃないんだけど。

単に、見ず知らずの自分を助けた理由を聞きたかっただけだ。けれど、名乗られてしまった以上、名乗らない訳にはいかない。名前を訊ねたという形になってしまった以上は尚更だ。

「私はリーサ……じゃない。今日は違う。……右京薫（うきようかおる）です。ありがとう、エシユロス君……」

理由があつて普段はリーサと名乗る機会が多かった為に、女——薫

は本名を忘れかけていた。

歯切れの悪い自己紹介になっっていないかと心配するが、直ぐにそんな心配は吹き飛ぶ。

突然エシユロスが立ち上がり、大きく両手を広げる。

瞬間、バアンバアンと、二回の銃声。男の一人が少年の、エシユロスの背中を撃つたのだ。

「ぐぬっ！」

痛々しく呻き声が上がった。

「エシユロス君！」

薫は少年の名を叫んだ。

薫は思い出した。自分を追っている男たちのことを。エシユロスの登場に吃驚して失念してしまっていた。自分に対する復讐は終わっていないことを。

いくら何でも今のは不味い。エシユロスは片手で男を殴り飛ばす怪力の持ち主だが、銃を食らって生きていられるという保証もない。それに、今の銃弾は心臓にダブルダップで二回、完璧に直撃した。

死んだ。薫はそう思った。

けれど――。

「大丈夫……私は銃弾の一発や二発じゃ死なない」

エシユロスは立ったまま、余裕とばかりに笑っていた。

だが、次の瞬間には神妙な顔つきになり、男の方を見た。正確には、その一人が持つ、自動小銃を。

「だが、正直あれは食らったらキツイかもしれない。それに私が倒れば、貴女が危険になる」

そこでと、エシユロスは懐から本を取り出して薫に差し出す。三角形が二つ連なり、砂時計のような象形が刻まれた黄褐色の本であった。

「何……これ……？」

「読めるなら、声に出してみてくれ。徒手でもやれないことはないが……もしかしてということもある。だから、頼む」

薫はこんな本が何の役に立つと胡乱がりながらも、エシユロスの目

は真剣そのものであった。

嗚呼、最早死ぬと思っていた身だ。

一時の僥倖で助かった身だ。

ならば、良い。読んでやる。生きる為に――。

薫はエシユロスから黄褐の本を受け取り開く。

捲る、捲る、捲る――。

その中には見たことない、象形文字めいたものが表紙と同じ色で描かれていた。矢張りその多くは意味不明であったが、唯一文字が読める頁が存在した。

「第一の術――」

銃を持った男がエシユロスに引き金を絞ろうとしていた。

急げ！ 疾く！

「グランドムッ！」

瞬間、薫の手の本が、目を開け続けることも難しい強い黄褐の光を放った。

LEVEL 2：震え笑う女

一つ縛りに纏めた、波打つ黒髪。精気をまるで感じさせない人形めいた白い肌。桃色の唇。

少年の目には纏っている赤いカクテルドレスがとても色褪せて見えた。

屹度、少年はこの時、瞳を、否少年を構成する総てを、奪われた。

†

風にかき消されてしまいそうな程か細いのに妙に通る薫の声に呼応するようにエシユロスは、地面に手を当てた。

「何、意味分からねえことしてやがる！ 気でも狂ったかア!!」

男の一人がエシユロスの行動を嘲笑した。

——その時。

豪と、凄まじい音がした。そして、その音の後、男がエシユロスを嘲笑することも、別の男が同調することもなかった。

皆が、その光景を呆然と眺めていた。

人間には到底視認不能な速度で畳返しのように持ち上がった二枚の土壁が、エシユロスを笑った男を押し潰す様を。人間の常識では考えられない超常を。

土壁が消える。其処には、男はおらず、代わりに赤い水たまりめいたものが残っていた。

「今のは……?」

誰に聞くでもなく、薫は疑問を口にしていた。

それを質問と捉えたのか、エシユロスがにこやかに答えた。

「グランダム。私の呪文だよ」

「呪文?」

「俄かに信じがたいかもしれないが……私は此処とは違う世界からやって来た者。貴女達風に言うなら、魔物と呼ばれる存在なんだ」

胡乱に過ぎる、尋常な人間ならば嘘八百と断じる事であろう。

仮令、在り得ない事象を見せられたとしても、そこに論理的証明が介入できる種や仕掛（トリック）の存在を疑わずにはいられない。人

間とは通常そういう生き物である。

エシユロスもそれを覚悟した。

だが、薫は――

「そう、貴女魔物なのね。そう――そう――そう……」

笑ってエシユロスの言葉を納得した。

笑って――。

頬が裂け、顔面の筋肉が半ば崩壊しかかっているかのような、凄惨としか表現しようがない笑みだった。

少なくとも、この場の誰もが、自らを魔物だと語るエシユロスさえも、この種の笑みは見たことがない。

ドク、ドク――。

エシユロスは不自然な動悸を覚え、胸に手を当てた。

――どうということだ？ 何故、そんな顔をしている？ 修羅場を経験しているのか？ いや、見るからにトーシロだ。それが何故“死”を目の当たりにしてこんな顔をしている？

自らに問い掛けるが、明確な答えは見つからない。

加えて、薫はただ笑っているわけではなかった。

震えながら、顎をかくかくと鳴らしながら、冷汗を流し蒼褪めた顔で笑っているのだ。

薫の中には恐怖と歓喜が同居している。

エシユロスはそう考えたが、その理由についてまでは判然としなかった。

そうこうしている内に、

「悪魔（ディアブロ）！」

「悪魔（ディアブロ）！」

不良の男たちは震えながら恐々とした叫び声を上げた。

拳銃や小銃を持っている男の何人かはそれを発砲。

悲鳴を上げるガバメントとH&K。薫とエシユロスに降り注ぐ鉛の驟雨。

「拙ッ?！」

エシユロスがそれに気が付いて振り返るが間に合わない。

当たる。

覚悟し、齒を食いしぼる。だが、

「第二の術 “グレイシル”！」

寸での所で発生した泥の壁に阻まれ、それは防がれた。

否、エシユロスが泥の壁を作り、それを防いだのだ。

「……成程。これを唱えると、君が魔法を使ってくれるわけね。さっきのは土の壁を使った攻撃。今のは土の盾か。でも、一体何の力を利用してるんだろ？ 私が本を読むことをトリガーにしているんだから、“私の”何かを利用してあるんだらうけど……」

そう、薫が説明した通りである。

本に書かれた呪文を読めば、魔物がその術を使う。名称によって現れる効果は様々であり、そしてそれらは本を読める者から発生される力を利用している。

「心の力だ」

「心の？」

「“アイツが憎い” “これが欲しい”。そういった人間の感情のエネルギーを利用して、私達が本の持ち主（パートナー）の唱えた呪文を使うんだ」

「ほへえ……」

間抜けにすら声を上げていると薫は、逃げようとする不良たちを見止め、本を開いた。

瞬間、本から辺り一帯を包み込むほど強い光が放たれる。

「道を塞げ “グレイシル”」

ふざけている様にも聞こえる指示と、心の力から伝わって来た本の持ち主の“願い”を感じ取り、エシユロスは男たちの唯一の退路に泥の盾を発生させた。

「ひいつり!!」

男たちからは悲鳴を上げ、腰を抜かした。

動けない。立ち上がることもままなら無い。

当然だ。先程一人が殺されるのを見せつけられ、此方の攻撃が完全に防がれるということが証明されたのだ。

予測できるのだ、簡単に、未来が。

答えは、一方的な蹂躪でしかない。

「なるほど、こういう感じか」

一方、捕食者たる薫は至って淡々とした口調であった。

「レ、淑女（レディ）……」

「何、かな？ あと、呼び方はリーサか薫か、でなければお姉ちゃんで」

「では、カオル。その、何だ……。貴女は、殺すのか？」

エシユロスの声は上擦っていた。

薫から齎される答えを恐れて。

うーんと、眉を寄せて頬を手に当て薫は唸り声を上げる。

エシユロスの目には、薫は子供がいてもおかしくない大人の女性に見えた。けれど、その仕草は如何にも幼く、だのに、妙に似つかわしいとも感じてしまう不可思議な感覚に襲われる。

常体であれば、エシユロスも見とれてしまっていただろう。

「あの人達なら……まあ、X—MENか何かでないなら、死ぬんじゃないかな？」

他人事のように自分が殺す人間のことを語りさえしなければ。

ドク、ドク、ドク——。

未だに続く不自然な動悸を、エシユロスは鬱陶しく感じていた。

その胸の高鳴りに呼応するかのように、薫の手の中に在る本が更に光を強めた。

「エシユロス君、また呪文が出たよ。今度は二つ」

「何?！」

「早速使うね」

エシユロスですらいきなりすることに驚愕しているというのに、薫には全くと言って言いほど躊躇いが無かった。

ドク、ドク、ドク、ドク、ドク——。

最早、動悸が止む気配はない。額に落ちる脂汗の滑りを感じながら、エシユロスはそう思った。

「第三の術 《グランバオ》」

術の発動に従い、エシユロスは地面に手を当てた。

刹那、耳を劈くような音と膨大な光を伴って、地面が爆発した。

「ぎゃあああああ!!」

舞い上がる粉塵と共に、男たちも虚空へと投げ飛ばされる。

エシユロスは空を見上げた。千切れた四肢が点在していた。

阿鼻叫喚と、この光景を名付けてしまっても差し支えないだろう。

併し——あゝ、無情（レ・ミゼラブル）。

薫は、もう一つの呪文を、躊躇いなく唱えた。

「第四の術 『グランガルゴ』」

ドク、ドク、ドク、ドク、ドク、ドク、ドク——。

厭な動悸は止まらない。それでも、エシユロスは唱えられた呪文を発動する。

本から伝わった心の力がエシユロスの両手を輝かせる。その手で以て、地面に、掴むようにして触れる。

針山地獄。

発生したその惨状はそう評するに相応しかった。

地面から幾本もの土で創られた棘が湧き上がり、最初の術（グランバオ）で投げ出された人間の腹に突き刺さっていたのだ。

死屍累々、鬼哭啾啾。

魔物を名乗ったエシユロスにとって見ても、その光景は惨憺たるものである。

にも関わらず——

「ふふふ」

その場で只一人、微笑みを零していたのは、人間であった。

「アツハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

哄笑する。天を仰ぎ、顔を覆い、先程と同じような笑みで。

「何、コレ？ 分かんない。何て言ったら良いんだろう？ ああ、でもなんか、ヤバイ」

分からない。

それは、今、エシユロスこそが言いたい言葉であった。

薫という人間が、まるで分からない。

人殺しが好きなのだろうか？ だが、それにしても、彼女の足は生

まれたての小鹿のように震えていた。

恐怖はしているのだ。

にも関わらず、笑っていた。

「ねえ」

「な、何だ？」

針山地獄を仰いでいた薫が自分の方を振り向いた為に、エシユロスは身震いした。

ドク、ドク、ドク、ドク、ドク、ドク、ドク、ドク、ドク、ドク――

鼓膜の裏にこびり付いて、心音が離れそうにない。このまま、耳を引きちぎってしまいたくなるような衝動に襲われるエシユロスに比べ、薫は至って普通に微笑んでいた。

可憐にすら映る程、至って普通に。

「エシユロス君、って言ったよね？」

「出来れば君は無しで頼みたいのだが……」

「じゃあエシユロス」

にこりと、楽しそうにその名前を口ずさんだ。

その表情を見て、

「ああ――」

エシユロスは感嘆した。人間相手とはいえ、戦闘中であつた為、薫の顔を、姿を見ていなかったから。

改めて見て、電流が走る感覚を覚えた。

一つに束ねた波打つような緑の髪。憂いを帯び倦怠的に半眼した濃鼠の瞳は、死の気配すら感じさせられ見つめているだけで呑み込まれてしまいそうになる。薄っすらと薫がかつた桃色の唇は、か細くもよく通る薫の声には成程、似つかわしいだろう。

ボディラインがはつきりと分かる赤いカクテルドレスを着ており、思春期を迎えるエシユロスにとって毒とも言えた。そのはつきりと分かるボディラインというのが、肉付きよく男性の性的な欲望を刺激してやまないものだったから。

ただそれらの総てがどこか態とらしい。

創り物だ。右京薫というのは、精工に作られた美だ。精気がまるで感じられない人形めいた白い肌と相まってエシユロスにはそう感じられた。

「エシユロス？」

「何でもない！」

存外に大きな声が出た為に、薫もエシユロス自身も、目を丸くした。

「そ、それで、何だ？」

「色々、君と話したいと思って」

薫は黄褐の本をエシユロスに見せながら、

「この本のこととか、君自身のことについてとか、ね」と補足する。

「良い？」

自分をじつと見つめる薫を見て、エシユロスは

「愚問だよ、カオル」

と、幽かな笑声を零した。

「聞きたいことがあるのは、私も同じだ」

LEVEL 3：哭く少年

「どうぞ、上がって。……と、私の家じゃないから、あまり偉そうなことを言えないんだけど」

薫がエシユロスに案内した場所は、海辺にひっそりと居を構えた、小さなホテルの一室であった。

「貴女の家じゃない？」

「泊まってるの、ココに」

「旅行、ということか？」

「まあ、そんなところ」

何処かその辺で寛いでいてと言われ、エシユロスは部屋を見渡す。腰を落ち着けられそうなのは、白いダブルサイズのベッドかその隣に置かれたテーブルか。

エシユロスはテーブルを選び、用意されている簡素な椅子に腰かけた。薫は、部屋に備え付けられたポッドで湯を沸かし、珈琲を淹れている。

「エシユロス、珈琲飲める？」

「勿論」

薫は自分に背を向けているというのに、エシユロスは微笑みを返した。

「今のは、『好き』って感じの声だね」

「分かるのか？」

「一寸ね。そういうの当てるの、得意かも」

そんな遣り取りをしている内に、薫が白い陶器製のカップを二つ持ってエシユロスに向かい合うように座った。

「どうぞ」

差し出されたカップを自分の鼻の前に持っていき、エシユロスは目を瞑る。

スウーと、僅かに鼻から空気を吸い込んだ。

漂う香りを手繰り寄せるように。

「……安ホテルのサービスだよ。上等なもんじゃないよ」

苦笑する薫をよそに、エシユロスは無言で珈琲を啜った。

そして、無言でカップを机に置いた。

「貴女の言う通りだ、腹が立つほど不味い」

エシユロスはやけくそ気味に笑った。

「そんなに？」

気になって、薫もカップに口を付けた。

……待っていたのは、沈黙であった。

空気が一気に重くなる。お互いに本題に入るタイミングを失ってしまった。

「……ねえ、エシユロス。君、煙の匂い、大丈夫な人？」

その空気を最初に割ったのは薫だった。

「大丈夫だが……」

「煙草、吸って良い？」

スカートのポケットから取り出した銀のケースを見せて訊ねた。

「ああ、煙草か！ 別に構わない」

「サンキュ」

「済まなかった。気が付かなくて」

「良いよ、気にしないで」

申し訳なさそうに項垂れるエシユロスを見て、薫は苦笑しつつ銀のケースを開き、其処から朽葉色をした小指程度の太さで5 cm程度の長さの紙巻煙草を取り出した。

見ようによつては葉巻に見えないこともない。

「リトルシガー……って言ってるね。フィルター付きの葉巻なの。気に入った銘柄がキューバにしか売ってなくて。よく来るんだ」

薫は煙草を口に銜え、使い込まれ彼方此方塗装が剥げた赤いオイルライターで火を点けながらそんな与太話をした。

「だから、第二の故郷みたいなものだけれど。本籍も在住も、日本の静岡県」

薫はまたも紫煙を吐いて、エシユロスを凝視した。

「さて、そこで最初の質問だけど、魔物の君は何処から来たのかな？」

エシユロスは薫の瞳に得の知れぬ不安を覚えた。

何もかも呑み込んでしまいそうな、精気が、否、何もかも空な、暗い瞳に。

「魔法……術とか呪文って言った方が良いんだっけ？ まあ、それが使えるってことから君が魔物とか、人間や動物ではないそういうもの”ってというのは明白だけど。そんな君がいたのはどんなところなんだろう？ 円谷プロの怪獣宜しく何処か未開の地からやって来たのかな？ それとも地獄みたいな、全く別の世界？」

その問い掛けに、エシユロスは不味いと分かっている筈の珈琲を啜る。

「此処——人間の住むこの世界とは別の世界から来たんだ。でも、”地獄”ではないな。魔物と言っても貴女が思っているような劣悪な場所から来たというワケではない。もっと、私達の世界は、もっと平和な良い場所だよ」

その不味さからか、エシユロスは眉間に皺を寄せ乍ら、何と言ったら良いか分からない表情をした。

「そうだな……。 ”魔界” という言い回しが正しいだろうか……」

「 ”魔界” 。その心は？」

エシユロスの回答に、薫は疑問符を浮かべた。

「人間が科学を頼りに生き、発展してきたように我々は魔の力——詰りは術を頼りに生きてきた。 ”魔” を使いそれを頼りに生きる者の

”世界” 。だから、 ”魔界” 」

「ほうほう」

薫は、子供だと思っていたエシユロスが思いの外しつかりと筋道だった理論を展開したことに驚嘆した。

若しかしたら、自分が思っているよりもエシユロスは幼くはないのかも知れないと薫は考える。

「それで、君は如何して私達の世界……まあ、簡単に ”人間界” とかって呼ぼうかな？ 如何してやって来たの？」

煙草の灰を、テーブルに備えられた灰皿の中に落としながら薫は確信に迫る。

再び煙を呑んで、更に訊ねる。

「人間相手に戦争しに来た……なんてことはないよね？」

「貴女は阿呆か？ こっちでは魔物は人間のパートナーが呪文を唱えないと術が発動しないというのに。如何して、戦争なんて出来る？」
「そうだね。というか、魔界では人間がいなくても術が使えるんだ。なのに、なんでこっちでは本と人間がないと使えないの？」

エシユロスはピクリと額を動かした。

——もしかして、俺が呪文で攻撃してくる……自分に危害を加えられる可能性を確かめたのか？

訝し気に薫の顔を覗き込む。

併し、エシユロスは呆けたような顔のその腹のうちがまるで読めなかった。

スーっと、珈琲を啜る。少し温くなっていた所為で不味い物がより一層不味くなり、エシユロスは苛立った。

「……君が考えているような思惑は私には無いよ。ただの好奇心」

目を見開くエシユロスに、薫は噴き出した。

「安心して。君が詳しく何を考えているかまで分かるわけじゃないから。お客様相手の商売の勘っていうのかな？ 私のこと腹に真っ黒いもの隠した女とも思っているのかもしれないけど、それは違うよ」

薫は自分の胸に手を置いた。

「私は右京薫。職業、風俗嬢。最終学歴、中学校中退。持っている資格は、普通自動車免許と大型二輪免許のみ。道を歩けば雑草よりも沢山見かける、何処にでもいる弱い女です」

そう説明し、にこりと笑ってすり減った煙草をもみ消した。

「……というワケで。これで私に対する警戒心は解けたよね？ 君のこと、本のこと、君が此処にいる理由。全て話して貰おうか」

そう言ってまた、煙草に火を点け、紫煙が齎す脳が灼けるような痛みを楽しんだ。

「ああ、そうだ。魔界とこっちじゃ学校制度って多分違うから一応注意しておくけど。中学退学っていうのは、馬鹿の中の馬鹿なので。そ

ういう人にも分かり易い説明を心掛けて欲しいな」
そう、要求を加え乍ら。

†

そうしてエシユロスが薫に教えたのは次のような内容であった。
魔界では千年に一度王を決める戦いが行われ、それは人間界で開催される。その王の候補は選ばれた百人の魔物の子。それぞれが本を持ち、その本を読むことが出来る人間をパートナーと共に、王の座を掛け戦う。本は人の心を力の源とすることで、魔物の術を発現させる。また、この本自体が魔物の子の王位への挑戦権であり、それを燃やされることはその権利を失うことを意味し魔界へと強制送還される。

「……つまり、術を駆使して本を燃やし合う、所謂バトロワってこと？」

「そういう解釈で間違いない」

薫が噛み砕いた内容を、エシユロスは肯定した。

「あれだね、あれにそっくり。仮面ライダー。十三人出てくるヤツ」

「……そっちについては首肯しかねる。何だ、仮面ライダーって」

困ったように顔を顰めるエシユロスを無視して、薫は話を続けた。
「思うに、殆どの人は魔物の力に魅了されて利用しようとするのだからうけど。でも、これ、無闇に争い事に巻き込まれたくない本の持ち主もいる筈だよな？ そうなったらどうするの？」

薫の問い掛けにエシユロスは押し黙った。

「……と、自分で考えずにすぐモノを訊ねるのは頭の悪い子の典型だね。自分で考えよう」

腕を組みながら、そうだなあと呟いた後、薫は煙草を吸った。

本日三本目である。

「……多分だけど、本の持ち主の家族や恋人、それに友達なんかを人質に取るとか。さもなければ、本の持ち主の心の隙間に付け込んで操縦するとか。人間の世界にもそういうことが出来る人がいたりするんだけど、暗示や催眠みたいなことをしてみたり？」

エシユロスの白い顔は、より一層白く、青みを帯びて白くなっている。

た。

「まあ、そういう後ろ暗い策略は隠すものだよね、普通」

薫はにこりと微笑んだ。別に、それを説明しなかったことを責めているわけではと釘を刺し乍ら。

「でも、右京薫には残念ながらこれといって大事な人というのが思い当たらない。逆に怨みなんてものも持ち合わせていない。職業こそ娼婦ですが、『高級』と付くので世のサラリーマンが羨むような満ち足りた暮らしも出来ている。だから、特に魔物やその術を利用しようとも考えられない。暗示や催眠も……出来るなら説明も何も無く、それをすれば良いだけだから、君にはその手札も無い」

愈々、エシユロスは顔中からぼたぼたと冷汗を垂らし始めた。

「まあ、他にも方法はあると思うけど」

そう言つて薫は、煙草を灰皿に置いた。

そして代わりにその手がエシユロスに向かって伸びる。

エシユロスは何をされるのかと思つたが、意外にもその手はただ頬に触れただけだった。

ただ触れただけ。

なのに……。

「牡として、私を支配してみせるとか」

微笑みかける。ただ、それだけなのに——エシユロスの顔は熱を帯びる。

そして、

「え……あ……」

その意味を理解してエシユロスの顔は、燃えるように赤く染まった。

大人びた話し方をしていた。それなりに筋道だった見解も出来た。だが、エシユロスは、それでもまだ子供であった。

しかも、『そういったことを嫌悪しながら、けれど興味が出てくる年齢の』子供である。

その脳には否応なく、『羞恥』という傷が刻まれる。

「良いよねえ。自分の言いなりが出来て。それでいて分かるんだも

ん。女の子のこと」

「気になるよね、女の子がどうなってるか」

「王様にもなりたいもんね」

「それとも、私だけは王様扱いしてあげる？　　“ご主人様”？」

流れ込む、言葉の奔流。

伝わってくる異性の体の柔さ、また温度。

頭が蕩けそうな程の熱を上げる。体が重く、怠くなる。

灰皿に置いた煙草は未だに煙を上らせているのに、まるで匂いがしない。

息も絶え絶えに、呂律も回らない。

そして、下腹部に感じたことのない、熱を伴った甘美な痛みを覚え、

「うぐっ……ひぐっ……！」

エシユロスは、泣いた。

如何して泣いているのか、自分自身でも理解出来ない。でも止める事は適わなかった。

項垂れる。今は何もかもから目を背けたいとすら思った。

併し、

「なあんでね」

いつの間にかエシユロスの目の前にはいと口角を吊り上げた薫の顔が目の前にあつた。

エシユロスの顎に手を当て、無理矢理視線を持ち上げ、その上で薫はテーブルに身を乗り出していた、

「ほへ？」

全く頭が追いつかず、エシユロスは間抜けな声を上げた。

「全部冗談。揶揄っただけだよ。そもそも私は君と戦わないとは一言も言っていない」

エシユロスから顔を遠ざけると、薫はそう説明した。

「は？　あー！」

エシユロスはその指摘で漸く気が付く。

「俺と戦ってくれるのか？」

「うん。助けて貰った恩があるからね」

薫はニツと、白い歯を見せた。

「そ、そうか」

状況について行けないのか、エシユロスの返事は歯切れが悪かった。

「だ、だが如何して私をからかったりなんて？」

「ん？ 興味」

そう言つて薫は、一旦置いた煙草をまた吸い始めた。

「私の感覚では、君の見た目から年齢を考えてたんだけど。どう考えても『事案』になりそうな歳にしか思えないのに、妙に紳士的な態度と、しつかりした考え方だったから。一寸、そこら辺、胡乱になつちやつてね。それで確かめてみた」

「事案と言われても分からないが……。で、結果はどうだったんだ？」

「まあ、典型的な事案な子の反応だったよ」

ぷはーと煙草の煙を嬉し気に吐く薫に、エシユロスは、脱力した。

「ただ」

「ただ？」

まだ薫は何か続けるようで、エシユロスは顔を上げその言葉に耳を傾けた。

「ああいう反応をされると……。なんと言つていいんだろう？ 顔を

赤らめて、涙目までされるのは、その、何というか……。困る？」

薫は、頬を掻き、それでいて煙草の灰をテーブルに落としていた。

顔が赤いようにもエシユロスには見えた。

その理由は分からない。分からないが、これだけは確かに言えた。

「困るのは……」

涙を流す痴態を演じたのは誰だ？

実際、怖い思いをしたのは誰だ？

その答えは明白である。

「こっちだあああつああ!!」

窓が粉碎せんばかりの怒号を上げた、エシユロスである……。

LEVEL 4：エリート魔物

「ところでエシユロス。実は、とても困ったことがあるんだ」

エシユロスを宥める為に連れ出した小さなレストラン。

アイスコーヒーをズビズビと飲みながら、頼んだフライドチキンの山に、一心不乱にかぶりつくエシユロスを、穏やかに見つめていた薫は突如思い出したかのように喋り出した。

「とても困ったこと？」

エシユロスは訝し気な顔をしながら、口の周りにべとりと付いた油を紙ナプキンで拭いている。

「旅行は今日で終わりの予定で、明日の朝には飛行機に乗って日本に帰るつもりなんだ」

モヒートの冷ややかなのだ越しを楽しみながら語る薫の弁に、エシユロスははあと生返事をした。

「で、君も当然ついて来るよね？」

「当たり前だ。パートナーがいなくては、私は戦えなくなるからな」

バリバリとフライドチキンを骨ごと貪りながらエシユロスは答えた。

「それで、どうやって日本まで着いて来るの？」

「いや、私も飛行機とかいうのに乗れば良いだろう」

「パスポート、持ってるの？」

「パスポートとはなんだ？」

エシユロスが真顔で返すものだから、薫は頭を抱える。

だが、エシユロスは魔界から人間界に遣って来てまだ間もないのだ。知らないのも仕方がないことだろうと結論して、薫は煙草を銜え、火を点けた。

「簡単に説明すると飛行機に乗るのに絶対必要なものだよ」

苦々しい笑みを浮かべ、薫は答えた。

エシユロスは手を顎に当て、ふむと、声を漏らす。

「話り、それが無いから私は日本に行くことが出来ない。そう言いたいわけだな？」

「さらに言うと、君、戸籍無いよね？ 向こうにはあるかもしれないけど、人間界では絶対に」

「魔界での戸籍が通らないとあらば、な」

薫は煙草の煙を肺に吸い込んでしまい、

「げほ、ごほっ……！」

咽た。

「おい、大丈夫か!？」

エシユロスは椅子が倒れるのも気にせず、立ち上がって薫の傍に寄り、背中を擦った。

「だ、大丈夫」

そう言っただけでエシユロスを席に戻した。

実際、大したことではないのだ。

薫の吸っている煙草はリトルシガー。分類上では、紙巻煙草ではなく葉巻になる。そして、葉巻は紙巻煙草と違い肺喫煙ではなく、口腔喫煙で楽しむものだ。詰り、思い切り煙を吸い込んではいけない。

吸い込めば、強烈なニコチンとタールに気管が悲鳴を上げ、咽るところと相成る。

丁度、今のよう。

喫煙者でありリトルシガーを愛飲している薫も当然、そうなるとは理解していた。それでも、『やってしまった』のは、激しい動揺からだ。

人差し指と中指に煙草を挟んだ右手の手首を、薫は凸に当てた。

「どうしようかなあ……。ココが日本ならパスポートの一つや二つ——戸籍だってダンさんに頼めば見繕ってくれるのに……。困ったなあ」

ダンさんというのは、薫が働く店のオーナーである。

名前は檀龍一。尤も、本名であるかは薫ですら定かではない。

職業が職業——所謂、暴力団若頭であるため偽名を使っている可能性もある。

ただ中学を中退しこれからどうするか困っていた薫を拾ってくれた男であり、経営者としてもやり手で頼りになる人というのが印象である。

頼めば大抵のことはなんとかなる。ただこの場合は、彼女と彼を隔てる物理的な距離という大きな問題が存在する為、その選択肢は不可能である。

……打開策は見当たらない。一旦、落ち着こうと、煙を吸い込もうとしたその時、

「ちよつと良いか?」

エシユロスが挙手した。

「ん? 何かな?」

「そのパスポートというヤツだが、モノにもいるのか?」

「原則、というか要らないね。モノという括りなのに持つてる場合とかあるけど」

古代エジプト第十九代王朝三代目王、カルナツク神殿、アブ・シンベル神殿、ラツメセウスなど数々の神殿を築き上げ「建築王」の異名を持つラムセス二世の木乃伊はパスポートを所持している。

人の遺体に関しては曖昧としてるところがあるが、「モノ」の括りに含まれるだろう。

これが詰り、「モノ」がパスポートを所持する場合である。

とはいえ、これは例外中の例外であろう。

この世は不思議なことに溢れているとはいえ、飛行機に積み込まれた狸の信楽焼きがパスポートを申請するなんてことは恐らくない。

「そうか、ならば……」

エシユロスは右手で顔を覆い、気障つたらしい笑みを浮かべ、

「こういうのはどうだ?」

どう問うて、フィンガースナップをした。

次の瞬間、何事かと薫が思う暇すらなく、

「おぉ……」

嘆声を上げることになった。

†

「お姉ちゃん、だいじょうぶ?」

隣の席に腰かけていた五歳くらいの女の子に声を掛けられて、薫はきよとんとした表情をした。

「えつと……」

薫は女の子の二つ縛りの亜麻色の髪と、そばかすに彩られたチャームングな笑みを見て、回答に窮した。女の子の言わんとしていることがまるで掴めない。

「苦しそうだよ。どっかわるいの？ おかぜひいてるの？」

然う指摘されて、先ほどから自分が何度も何度も、座る位置をずらしていることに気が付いた。それが屹度、女の子には苦しそうに見えるのだらう。

薫は柔らかく微笑んで、

「大丈夫。お姉ちゃんは元気よ。ただ、一寸眠れなかっただけだから」と答えた。女の子が話しているのはデンマーク語だった。難しい言葉であるために、薫の中は年相応な話し方が出来ているか不安を覚える。

「そうなの？」

女の子は首を傾げる。それに対して、薫はそうだよと、答える代わりに無言の笑みを返す。

「すいません。娘が御無礼を……」

女の子の隣に座っていた三十代前半ほどの女性が、申し訳なさに首を垂れた。娘と言っていたから母親なのだろうと思い、

「いえ、そんなことは」

と、薫は恐縮したような表情を浮かべた後、

「気遣いの出来る、優しい子だと私は思いますよ」

女の子の頭を撫でる。

今度は母親の方が照れたように顔を赤らめた。

「お姉ちゃんごりよこう？」

にいと笑みを向けて、女の子は自分の頭を撫でる薫を見上げた。

「うん、御旅行よ」

薫は依然、微笑みで言葉を返す。

「お姉ちゃんも！ わたしも！」

手まで上げて女の子は答えた。場所を弁えれば女の子を叱るべきなのだろうが、周りの辺りを見渡し、別段と気にしている人がいない

のを確認して薫は女の子を叱るのをやめる。

「お母さんのお友達にあつたの！ とつてもおもしろかつた！」

旅の思い出を見知らぬ「お姉ちゃん」に伝える娘を母は、

「ごらもう！ お姉ちゃん迷惑してるでしょー！」

と叱りつけて、席に座りなおさせた。女の子の膨れっ面が、薫には可愛らしく映る。そんな母親の手を見て、薫は、

「おっ？」

と声を上げる。

——ああ、なるほどね。

得心していると、母親が、

「もう、本当にすいません。気を悪くされたでしょう？」

と謝ってきた。また、薫は笑顔を作り、

「これくらいの歳の子はそんなもんです」

と返した。

「ああ、でも僭越なら申し上げる事があるとするなら……」

と人差し指を立てる。

「お母様は、少し周りを気にしすぎかもしれません。別に小さい子がいるからといって恋をしてはならない……なんてことはありませんから。寧ろ、貴女が楽しそうならその子だって嬉しいでしょう？ 子供なんてそんなもんです」

女の子の母親は、左手の薬指を隠してカツと顔を赤らめた。

薫はそれに目をくれることも無く、膝の上に置いたワインレッドの手提げ鞆に手を伸ばし、その中から本を取り出し読み始めていた。

——飛行機がキューバを経つてから一時間ほど。

女の子の指摘に因って薫はやっとエコノミークラスの座席では自分が寝付けないことに気が付くことが出来た。

ともなれば、日本に着くまで手持ち無沙汰である。本でも読むに限る。

薫が読んでいるのは恋愛小説。というよりも、本はそれしか読まないし、更に言えばハーレクイン限定である。

いつ頃からか、ハーレクインの小説を愛読していた。紙といい表紙

といい、妙に安っぽい作りをしているのがツボに嵌ったのと、ある言葉が想起されるその内容に気が入っていた。

その言葉とは——「機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）」。
歌劇に於いて困難な試練、解決し難い状況をクレーンのような仕掛けを用いて神や天使を下ろすというものである。

転じて意外な手段、予期せぬ人物の登場により事が急転的に運ぶことを指す。

それが悪いというワケではないが、この手の本の場合よく一組の男女を隔てていた壁というものが、突然、あっけなく無かったこと同然になってしまうのである。

良いことだと、薫は思う。整合性を保った不幸よりも、不合理な幸せの方が、何百倍も良い。

特に娼婦という職業柄、筋道だったどん底の人生の話なぞよく聞く。

……そういう話を聞いているのは、薫としては疲れるので厭だった。現実周りがこの有様だ。フィクションの中くらいはハッピーエンドが良いと感じるのも当然であった。

と、「機械仕掛けの神」という言葉から思い至る。エシユロスがやったことは、詰りそういうことなのではないかと。

「まさか、あんなこと出来るなんて思わなかった……」

人知れずそう呟いて、煙草が欲しいと感じたその時だった。

（そんなに驚いたか？）

突然、この場にはない筈のエシユロスの声がして、薫は辺りを見渡した。

（見渡しても私はいないぞ。所謂念話というヤツだな。未だ、私は貨物室の中だ。……正直暇になってきた。脳内詰めチェス（プロブレム）も飽きてくるぞ、いや本当に）

存外にくだらな理由で超常的なことをこなすエシユロスに、薫は呆れた。

「……わりと凄いことを、下らないことに使っていないかな？」

（貴女が思っているような、上等なものじゃあないんだ、コレ。まず、

相手の顔が分かっていると使えない。話せる距離にも制限がある。加えて……私自身が把握しきれいていない条件があるらしい。精々、運が良ければ内緒話が出来てくらの、クソツタレな力だ。これより上等な念話をこなす魔物はいくらでもいる)

薫の指摘に、エシユロスは自嘲気味にぼやいた。

「でも」

(念じるだけで構わない。それで通じる。……指摘するのが遅かった。貴女を独り言ばかりの痛い女性にしてしまうところだった)

(……まあ、痛い子というのも悪くないけれどね。でも、こういうことが出来るって割とエリートなんじゃないの。ほら、この窮地を救った変身にしたってさ、凄いと思う)

日本へエシユロスが行くにはどうすれば良いか。

結論的に言えば、「渡航」ではなく「輸送」することを選択したのだ。

畢竟するに、エシユロスは石像に化けることが出来た。加えて言うならば、人型のものであり、自分とサイズがある程度似通うものという制限こそあれ、姿を変えるといふ能力があったのだ。

……育ちの良さそうな少年にしか見えないエシユロスの姿も、本来よりも人間に寄せたものであると言われ、薫は銜えていた煙草を零した。

特に、術の系統的に石像に化けることには並々ならぬ自信を持ち、事実空港でエシユロスを見かけた人、エシユロスを通した機械の総てが生物であると見破ることが出来なかった。

このまま石像として、税関と入国管理局を切り抜けようというのが、薫とエシユロスの考えた算段であった。

(エシユロス?)

反応が無かったため、薫は名前を呼んだ。

(今……)

(今?)

(お、俺をエリートと言ったか?)

やっと帰って来たその声は、薫には震えている様に聞こえた。

まるで耳を疑っているかのような。

(うん、言ったよ)

偽らざる事実である。薫は肯定するしかなかった。

それだけだ。にも関わらず――

(ハッハッハ！ カオル、貴女は目の付けどころが良いな！)

何故か、称賛を受け薫は困惑することになる。

(そうだ、私は魔物の子の中ではエリートな方だった！ 使える呪文も早速四つだ！)

声色から、あからさまなまでに、喜びが溢れ出していた。

白い歯を見せ、グツと力強く握り拳を見せつけるエシユロスの姿が薫の目にはしっかりと見えた。

それほどまでに、嬉しさを隠しきれていない。

(……これからエリートって呼ぼうか?)

(善処してくれ!)

その要求を聞いて薫は完全に結論付けた。

エシユロスは子供だと。

「お？ おう？」

そう思った瞬間、頭に怠さを覚え、額に手を当てると、熱を感じた。

ぼんやりとした、けれど熱と分かるそれ。

……風邪でもひいたのだろうか？ それとも空調が悪いのか？

そう疑問を抱いたその時――。

バァン！

突如、機内に銃声が木霊した。

LEVEL5：運と、君の優秀さ

「エリート……俺が、エリートか……」

薫に言われた言葉を反芻してエシユロスは顔を綻ばせる。

“エリート”。

集団の中で抜きんでた者を指す言葉であるが、エシユロスはこの言葉が好きではなかった。

——お前は、常に先頭に立つ者、エリートでなくてはならない。エリートでなくてはならないのだ！

——ハン！ エリートぶりやがってムカつく野郎だぜ！

——お前程度がエリート？ 笑わせる。

過度の期待、疎外感、嘲笑……。その言葉に込められていたのはエシユロスにとつて悪いものでしかなかったから。

だが薫の『エリート』という言葉は違った。

負の感情は感じなかった。代わりに感じたのは素直な称賛。

心臓が跳ねる。

——上手い言葉は、見つからない。だが、薫にエリートと呼ばれるのは、良い……。かもしれない。

そう考えていると、ふと薫の笑顔が過った。

出会った時、岩棘（グランガルゴ）で串刺しにされた死体を直視し、ガタガタ震えながら浮かべた顔面が崩れたような笑みが。

人を揶揄うのと冗談が好きで、温和でよく笑う素敵な女性（ひと）。

エシユロスは薫に対してそういう印象を抱いていた。

だが、あの笑顔だけは気にかかった。

他人を殺すことが悪いのではない。その行動の良い悪いは別にして、生きる為に殺さなければならぬ場合もある。魔界にだってそういう人々がいたことをエシユロスは知っている。

事実、あの時、薫は男たちに軟派をされて、それを断った為に追いかけられ殺されかけた。エシユロスは聞いている。その人間の善悪は別にして、屹度誰にとつても生きる為の必要悪だろう。

だが、あれは違う。あの時の薫はそういう意思で殺したのではな

い。エシユロスはそう考えた。

人殺しを楽しんでいるとすら感じられる、あの笑顔。

——……俺の見間違いかもしれないが、ちゃんと聞いておくべきだろうか。

そこまで考えて、エシユロスは興奮のあまりに念話を切ってしまったことを思い出し、

(……カオル、すまない。うっかり念話を止めてしまった。自分から話しかけておいて、無礼千万だった)

謝罪から入って、質問を切り出そうとする。

だが、その質問をすることは適わなかった。

(ああ、良いよそれくらい。それより、今ピンチだからちよつと助けて欲しいんだ)

薫から救援要請(メーデー)がされた。

刹那、エシユロスに問うという選択肢は失せた。

(ピンチ? 一体どうした?)

(ああ、その前に。エシユロスは「テロ」って言葉の意味分かる?)

エシユロスは自信と余裕たっぷりにつつと短い笑声を上げて、

(暴力を傘に、国家・政府等の権力に要求或いは訴えを起こすことか?)

と答えた。

(さすがはエリートだ。では次に、「ハイジャック」って言葉は分かる?)

(それは……分からない……)

エシユロスの声の調子が沈み、クスリと笑みを零して薫は、

(航行中の航空機を武装などの恐怖を用いて乗っ取ることを意味するんだよ)

と教えた。

(知らないことがあるからとあまり私を侮らないでくれ)

と、エシユロスは釘を刺して直ぐ後、

「あっ!」

と貨物室に声を木霊させた。

(気が付いたみたいだね。そ、現在私がいる旅客室は自爆テロを目的とした武装集団に占拠されているのです)

「呑気に言うことじゃねえだろ!」

念話で話していることも忘れ、エシユロスは声を張り上げた。

……すぐに自分の行動を省みて、恥じ入るように咳払いすると、

(……すまない、取り乱した)

謝意を示した。

(だが、実際この状況相当拙いぞ)

念話の向こう側からも、エシユロスが緊迫しているのを受け取ってかそうだねと、薫から相槌が齎される。

一体自分の、自分たちの身に何が起こるのか? 自爆テロという概念は魔界には無かったが、エシユロスにもそれは想像ついた。

——爆裂するのだ、飛行機が。キューバの空港で見た巨大な鉄の物体が。

そうなればどうなる? 人間の薫は間違いなく死ぬ。魔物のエシユロスであつても耐え切れない。況や魔本なぞ形も残さず燃え去り消える。

エシユロスの首筋をじつとりと冷たい汗が伝う。

魔物の王という名の栄光が、泡沫へと消え失せる。そんなビジョンを想像してエシユロスはぶんぶんと首を振り、

(カオル、なんと少しでもこの状況打開するぞ!)

そう本の持ち主(パートナー)に訴えつつ、自らを奮い立たせる。

(うん、そうしようか。私も死にたくないし)

その声色は、エシユロスの目には映らない筈の薫の微笑みを感じさせた。

(よし、では作戦会議だ。カオル、詳しい状況はどうなっている?)

エシユロスの問いから数秒後に、薫は説明した。

(そうだね、人数は六人で多分全員男。顔は覆面で分からない。服装は……なんていうかラフだね。今から海にでも遊びに行ける感じ。それでいて、アサルトライフ……っていうのかな? 全員がそれ持つて、旅客室の前面に立ってるね。あー、あと可愛いCAさんが一人羽

交い絞めにされてるね。一寸、可哀想かも)

エシユロスは猛烈な苛立ちから舌を打った。

(女性を人質に取ったか。外道めが！)

(人質に取られてるのは、私達も同じなんだけどね)

そう茶化すような物言いの後、薫はああそうだと、ぼんやりとした声を上げ、

(要求を呑まないと飛行機を爆破するって言ってたから、爆弾を持つてるかもね)

と説明に補足を加えた。

ふうむと、エシユロスは唸り、顎に手を当てた。

(ということは、土を起点に爆発を起こす第三の術「グランバオ」は使えないな……。誘爆させる可能性がある)

(……爆発の危険ならどの術でもあると思うよ。衝撃が加わるから。でも、確かにその危険はmostかもね。というか、それ以前の問題だけでも)

(なんだ?)

(エシユロス、今、術使えるの?)

薫は素朴な疑問を口にする。

土棘(グランガルゴ)にせよ、土壁潰し(グランダム)にせよ、エシユロスの呪文は全て地面を起点にし、土を変化させ生み出される。無論のことこの飛行機には土などあるわけがない。懸念は当然であらう。

だがしかし、エシユロスはそれを一笑に付した。

(カオル、貴女は私を何と言った?)

暫くしじまが辺りを包み込んだ後、

(エリート?)

と、ウイスパーした薫の声が返って来た。

(そう、貴女が言う通り、私はエリート! 故に、このエシユロス、大地が無くとも術を使うことは出来るのだ! ……流星に土がある所に比べれば質は落ちるが)

最後だけ声のトーンが落ちていたからか、薫は念話の向こうでクス

クスと小さく堪えるように笑った。

(ま、まあ見ていてくれ、カオル。テロリストだかなんだか知らないが、その相手など、私にとってはフルズ・メイトを指すより易いさ)
(……それはとても頼もしいんだけどね。一つ聞いても良いかな?)

(何だ?)

(相手の顔、見えてるの?)

薫が何気なく発したその言葉に、エシユロスはキツと音が鳴る程、歯をきつく結んだ。

顔が見えているか——詰りはテロリストの詳しい立ち位置が分かるかということ。

残念ながら、その答えは否だ。そもそもそんなことが出来るなら……

(つて、出来るなら私に詳しい状況なんて聞かないよね)

……薫に頼る必要もないのである。

(仕方ない。こうなったら、運に賭けるしかない。盲滅法に術を放つ。下手な鉄砲も……人間の諺でそういうのがあったろう? あれで行こう)

(却下)

エシユロスの作戦を薫は切つて捨てた。

(何故だ!?)

そうだねと、一呼吸置いてから薫は諭すように説明した。

(呪文は唱えないと発動しないよね? でも、目下ハイジャックの真っ最中という緊張常態。そんな中で声を出す、なんて目立つことをすれば彼等を刺激する。そうなったら、間違いなく私に危害が来るよね? ひよつとしたら銃で撃たれるかも)

エシユロスは薫の言わんとすることを察し、アツと声を上げた。

(まあ、勿論私自身、死ぬなんて御免被るわけだけど……君的にも、私が死ぬのは困るでしょ?)

そう、一人の魔物に対して、本の持ち主(パートナー)は一人きり。それがこの「魔界の王を決める戦い」のルールだ。本の持ち主(パートナー)である人間以外には、その魔物が持つ本を読むことは出来ず、

仮に本に書かれた呪文を把握してそれを唱えた場合にも術が発動することは出来ない。それは別の魔物の本の持ち主（パートナー）であつてもだ。

……であるのならば、本の持ち主がいなくなった場合にはどうなるのであろうか？

エシユロスは考えた。屹度、王になる者には“運”も必要な要素なのであろうと。恐らく不慮の事故や、病気で本の持ち主（パートナー）が失われた魔物はその時点で――。

そこまで思考が及んでエシユロスは白い顔をより真つ白にした。

（あと、もう一つ問題があつて、この飛行機にいるカタギの人達に呪文が当たつて怪我したり――最悪死なせたりするかもしれないっていうのがあるんだ。まあ、君的には人間なんて私も含めて蛆虫同然だろうから、如何でも良いだろうけどね）

この非常時にあつても意地の悪い言い方をする薫に、さらにエシユロスの顔は青みがかかる。

暫し沈黙が流れた後、

（冗談だよ。ごめんね）

薫は小さく笑つた。

（笑えないぞ、カオル）

そう言いつつも、エシユロスの顔は色を取り戻していた。汗こそ、だらだらと流れているが。

（……と、ここぞでふと思つたんだけど、これ）

（これ？）

（そう、これ）

最初エシユロスは、“これ”がどれのことを指しているか分からなかったが、今こうしているこの状態を指していることに気が付く。

（念話のことか？）

エシユロスの言葉に、薫は澁刺とした声で、“YES”と返す。

（これなんだけどね、エシユロス、使うのに条件があるって言ったよね？）

（ああ、言ったが……。それがどうしたんだ？）

(確か、顔が分かっていないといけない。会話できる距離にも限りがある。だったよね?)

(勿体振らずに、答えてくれないか?)

エシユロスの言葉に、

(焦れ易い男の子は、女の子に嫌われるよ)

と冗談めかしく窘めてから、薫は本題に入った。

(ひよっとしたら、私がいる正確な位置が分かるかとも思ってた)

その指摘にエシユロスはハツとし、急いで真相を確かめた。

(分かる! 凄いで、カオル! 貴女がいる場所がハツキリと分かる

! 知らなかった! こんなことが出来るなんて!)

エシユロスは興奮気味に結果を伝えた。

(うん、ならなんとかなるね)

(な!! まさか、もう打開策を見つけたというのか!?)

驚愕に目を見開く間もなく、エシユロスに

(うん)

と短く、落ち着きながらも、自信が籠った返事が届く。

(……でも、成功させるには二つあるんだ)

薫の言葉にエシユロスは急かす様に、

(それは何だ?)

と訊ねる。

作戦に重要な点。その答えとは――

(運と、君の優秀さ)

――で、あった。

LEVEL 6：呪われなくとも穴二つ

「オラオラオラ！ 動くなよオ!! 蜂の巣になりたくなかったらなア!!」

ピエロの覆面を被ったテロリストの一人が銃を乗客達に向け脅迫している様を、薫は「粹がっている」と形容した。

辟易とするばかりである。

このテロリスト集団共は、薫の感覚から言ってらしくなかった。

実際、テロリストに出くわしたことなどないが、薫のイメージするそれは「ある信念や組織によって世間に大きな改変を齎さんと行動する人間」である。

併し、今飛行機を占拠している彼等は違う。

その動機は「裕福そうな暮らしをしている合衆国のクソ共がムカつくからホワイトハウスにデカい花火を打ち上げてやるんだ」というあまりにも短慮で直情的なものであった。

屹度、一時の興奮に身を任せて酔っているだけなのだ、薫は思った。

——あの子達、アレの臭いがするんだよね。

その根拠は彼等から漂ってくる臭い。百数十人は人がいるこの旅客室の、雑多な体臭やパフュームの混ざり合った混沌とした空間の中でもよく分かる、独特な甘い刺激臭。そういう友達がいるから、薫はよく分かる。

大麻中毒者（ジャンキー）の臭いだけはよく分かる。

服装からしても、アサルトライフルを肩から掛けて持っているだけで、アロハやタンクトップにハーフパンツと至って軽装。革命家などとは程遠い、町角で暴れるだけのチンピラというのが彼等の真実なのだろうと、薫は断定した。

——にしても、あの子達が持っているの、あれAK47だよな？ 軍事関係（ミリタリー）には詳しくないけど、よくこんなの持ち込めたなあ……。

AK47——恐らく世界で最も名を知られるアサルトライフルで

あろう。ロシアの銃器デザイナー、ミハイル・カラシニコフが製作したこの銃は、多少の歪みや機構内の不純物に混入に於いても動作する点、コピーや製造が比較的簡単にできる点などから、世界の至る所で活躍している銃である。

恐らく、今男たちが持っているのはAK47と見られるコピー品であろう。本物にスペックが劣る粗悪品であろうが、銃として十分な機能を備えている筈だ。

だが、それだけだ。

薫の知る限り、この銃には空港の金属探知機を通り抜けるなんて機能はない。

それ以前にライフルなんてかさばるもの、目視の手荷物検査の時点で引つ掛かる。況して、彼等のように鞆も持っていないのであれば、その隠し場所すらないということになる。

——どうも、あの空港の金属探知機と職員さん達はあっぱっぱーみたいね。リコールものだよ、これ。

恨み言の一つも言いたくなるが、それよりも今はテロリストだ。

「てか、これホントにアメリカに向かってんだろうな!!」

今度は、死神のような面を付けた男がぼやいた。

「おい、どうなんだア!!」

鶏のようなクリーチャーの覆面をした男が、羽交い絞めになっているキャビアアテンダントの耳元で怒鳴った。

「わ、分かりません。機長に確認してきますから……だから……」

「うるせえ!」

ガツツと、鈍い音が鳴った。

別の男が、キャビンアテンダントの顔に銃床を叩き込んだのだ。

「うぎいっ……!」

短く悲鳴を上げて、女は真っ赤に染まる顔を抑えた。

はあと、薫は呆れたようなため息をついた。

——理不尽だなあ。答えが分からないから答え聞きに行くって言うてるのに。

薫はこの時なんとなく、ブラック企業で働くサラリーマンの愚痴を

思い出していた。

言われたことだけやっていけば、言われなくても少しは自分で考えてやれと言われ、そうすれば今度は、指示されていないことはやるなと言われる。

まさに、今この時のように。

そして、次に思考が流れた先は、顔をぐちゃぐちゃにされた女性への同情だった。

薫が思うに、キャビンアテンダントは比較的整った顔立ちをしていた筈だ。筈だ——と曖昧な表現なのは、正直あまり顔をよく覚えていないからだ。苦手なのだ、人の顔を覚えるのが。意識的に覚えようと思えば大丈夫のだが、興味が湧かないと記憶に留まってくれないのである。故に、顔を潰された瞬間に正確な造形を忘却してしまった。

だが、多分綺麗な顔はしていた筈なのだ。

——なのに、潰すなんて酷いことする。というか、手元に置いておくなら綺麗な顔の方が良い筈なのに。そういう趣向？
ぐるり。

——まあ、それにしたって馬鹿としか言えないけど。

ぐるり、ぐるり。

——女の子を傷つけるにしろ、ハイジャックにしろ、なんでこんなことするんだろう？

ぐるり、ぐるり、ぐるり。

——それが楽しいとでも本気で思っているんだろうか。

ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり。

——そんなこと、する必要ないのに。

ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり。

——人間、生きてるだけで、最高なのに。

ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり、ぐるり——。

廻る、廻る、思考の渦。考えが纏まらない。感情が様々な方向に寄り道ばかりする。今はそんなことをしている場合ではない。

薫はそう自分を言い聞かせ、

「ひぐつ……！ うえつ……！」

「うるせえ！ 黙れ！ ギャンギャン泣き喚きやがって！」
女の泣き声と男の怒声によって、漸く決心を下した。

「あの……ちよつと良いですか？」

恐る恐るを装って、薫はゆつくりと手を上げた。

「なんだ？！」

ピエロ面の男の怒号を合図にカラシニコフの銃口と、目下人質状態の乗客たちの注目が一斉に薫に向けられる。

薫はゆつくりと立ち上がって、

「その人、怖がってます。離して下さいませんか？」

と男たちに懇願するように言った。

「ああ？！ なんで……！」

「私が！」

薫は男の言葉を遮り、

「私が代わりになりますから！」

と申し出る。

男たちは耳を疑って、

「はあ？！」

と大きな声を上げた。

「正気かテメエ！ なんでそんな要求呑まなきゃならねえ！」

今にも発砲しそうな程の勢いで、ピエロ面の男は叫んだ。

「で、でも」

薫は言葉を繋ぎ、

「本当にその人が可哀想で……それでもう我慢できなくて」

目に涙を浮かべ、同情を誘うような振る舞いをする。

「それに、貴方達も女性の泣き声なんて、聞いていたくないですよね？」

薫は懇願するように上目遣いをする。それこそ、褥で女が男に「愛」を求めるように——である。

「チッ！ そこまで言われりやしようがねえ……。それに、この役割は誰でも良いわけだからな」

ピエロ面の男は下卑た笑声を上げた。

周りの男たちも満場爆笑する。

「ありがとうございます」

と、薫は安堵したような表情を浮かべながら、内心ではほくそ笑んでいた。

思っていた通りだったからだ。そもそも、銃を持って旅客室を占拠した時点で其処にいる全員が人質であるのだ。ならば、敢えて手元の人を置いておく必要もない。

——これは空気作りだ。ただ銃声を以て恐慌を作り出し、自分たちがここを支配したのだとアピールするだけでは温い。より分かり易く伝える為のものが欲しい。その為の“人質”なのである。

だから誰でも良いのだ。キャビンアテンダントを選んだのは、単純だ。座っている客よりも、サーブの為に常に立っている人間の方がより狙いやすいからだ。さらに、力の無い女性ならば取り押さえるのも楽である。

また、人が百人も集まれば一人はいるかもしれない、無謀な勇気を発揮する心の綺麗な馬鹿という存在もある。こういう場面に真っ先に切り込んでいく向こう見ずな人間にとっては目に見やすい人質というものは最大の抑止力となるのだ。

……尤も、その点に関して彼が考えてなどいないだろうと、薫は踏んだ。

理由は至極単純。最終学歴中学中退の自分から見ても、彼等はあまりに阿呆に映ったから。

——などと思ったからだろうか。

「でもさあ、もしかしたら武器とか持って俺らに反逆しようとか考えてるかもしれないよなあ。怖いなあ」

死神のような仮面を付けた白々しく放った言葉に、薫は少し目を見開いた。

「だからさあ、ここで脱いでくれよお」

ゲヘゲへと厭な笑い声を男たちは上げた。

薫はまさかの反撃に少しばかり面を食らった。人を呪わば穴二つ

などとも言いが、本当に体験することになるなど思わなかった。

——まあ、でも。

……思わなかったが、薫は躊躇う素振りを見せつつスルリとドレスを脱いでいく。

——呪われなくとも、

そして、ゆっくりとブラジャーのホックを外し、

——使える穴は、

最後にショーツを下ろし、

——二つだけれど。

薫は彼等に生まれた儘の姿を晒した。

胸と秘部を手で覆い恥らうように顔を赤らめてこそいるが、薫の心中は至って「風」であった。

恥らうべくもない。薫はこの道十年にはなろうかという風俗嬢である。裸を見るのも見せるのも、自分にとっては呼吸と同程度の価値行動だ。

大衆の前？ 苦にもならない。プライベートで懇意になつてしまった客の趣向で「そういうこと」を人前でやったこともある。

娼婦侮るべからず。むしろこの瞬間、より大きな衝撃を受けたのは要求をした男たちの方であった。出来ない筈の要求を突きつけたつもりだった。よしんば出来たとしても、思い切り翳つてやろうかとも考えていた。

だが、現実彼女が肌を晒した瞬間、男たちは自分が飛行機を乗っ取っているということさえも忘れ、息を呑んだ。

綺麗な顔をしているとは思っていた。扇情的な身体つきをしているとは感じていた。だが、いざ実際に彼女の裸体を見た瞬間の、五体に核弾頭を受けたような衝撃たるや、想像に及ぶべくもない。

何もかも忘れ、自流に耽つてしまいそうな豊満乍ら、均整の取れた傷一つない姿態はそもそも男がし得る妄想を凌駕していたのだから。

「あの……彼女と私、交換で良いですよね？」

薫がキャビンアテンダントを指してそう訊ねたことで、漸く男たちは酩酊していた意識が覚醒する。

「お、おう」

一人の男の吃音めいた返事に薫は安堵とも羞恥とも、苦渋とも似つかない、或いは総てがない交ぜになったような笑顔を作る。

「でも、一つだけお願いしても良いですか？」

申し訳なさに顔を伏せながら、右手の人差し指を立てる。

「な、なんだ？」

薫はそつと自分が座っていた座席に置いたバックに手を伸ばし、その中から黄褐色の本を取り出して男たちに見せる。

「この本だけ、持っても良いですか？ おじいちゃんとの、大事な思い出で……。だから……」

潤んだ瞳で見つめてくる薫に、テロリストという名のごろつき達は互いに顔を見合わせる。

「……どうするよう？」

「良いんじゃない？ いくら武器にするたって、あれじゃあな……」

中々に分厚い為に、鼻頭を叩かれたら悶絶するだろう。だが、精々考えられるのはその程度の問題でしかない。

此方にはカラシニコフが六丁。本一冊で対抗出来る筈もない。

……と、男たちは考えた。

「有難う御座います」

そう本を大切そうに抱きしめ、軽くお辞儀をすると薫は涙ぐんだ笑顔を浮かべた。

約束は為った。キャビンアテンダントが男から解放され、それを見て薫も男の方へと向かおうとした。

その時、

「お姉ちゃん……大丈夫？」

隣の座席に座っていた母親と二人でキューバに旅行に来ていたという少女が不安そうな顔をして薫に訊ねる。

薫は笑って答えた。

「大丈夫だよ」と。

「ひいー」

併し、少女は薫の予想に反して顔を蒼褪め、悲鳴を上げた。

薫は余程、今の状態が怖いのだろうと結論付けた。

——それも、そうだよな。折角、お母さんと楽しい旅行だったのに。……新しいお父さんと暮らせる未来が待ってるのに。こんなの、嫌に決まってるよね。

——今、私になんとかするから。

そう決心し、男たちの元に歩み寄る薫は気が付かない。少女が恐怖を抱いた本当の対象に。

「あの……あまり乱暴なことはいしないで下さい。自分で言っておいてなんなんですが……その、怖いので……」

男の傍に寄って、震えながら顔を伏せる薫は懇願するような物言いをした。

行き過ぎた大麻中毒者の不良共は勝ち誇る様な笑みを浮かべる。それを見て薫はいと口角を吊り上げる。

——頼むよ、エリート。

そう心の中で、貨物室にいる少年を鼓すり、

「『グランガルゴ』！」

薫は呪文を唱えた。

刹那、旅客室の床を突き破りながら土の棘が男たちに牙を剥いた！
凄まじい勢いを持ってアッパーカットの要領で、土の棘が男たちの顎を正確に、かつ思い切り抉り込む。

吹き飛び、昏倒、戦闘不能。瞬く間に、ハイジャック犯たちは鎮圧された。

六人の男たちも、その光景を見ていた他の乗客たちも何が起こったのかさっぱり理解出来なかった。

だが、その中でもただ一人——いや、二人何が起こったのか正確に理解出来る者がいた。

「……私は念話を繋ぎ続け、カオルはテロリスト全員の正確な立ち位置が見える位置まで移動する。そして、そこから、男たちの位置を伝え、グランガルゴをブチ当てる……だったな、カオル？」

土の棘がいつの間にか消え去り、その代わりに薫の隣には金髪の十

歳ほどの少年が立っていた。

「うん。でも、流石はエリートだね。まさか、全員の顎に的確にブチ当たってなんて思わなかった」

薫は微笑して、エシユロスを称賛する。

そう、この作戦で重要なものの一つ、“エシユロスの優秀さ”。具体的に言うならば、術のコントロール力である。

術の発動をするのは、本の持ち主だ。術の出力を調節するのもまた本の持ち主だ。だが、実際に発動した術をどのように操作するかは魔物の方に掛っている。エシユロスがもしコントロールをミスすれば、当たらない、当たったとして意識を刈り取れない、滅茶苦茶な場所に当て飛行機を壊し逆に自分達の命を脅かすなどの危険があった。

その点に於いて、エシユロスは優秀な働きをしたといえる。

「貴女の作戦は穴だらけだったかな」

併しエシユロスの方はというと、不満そうに口を尖らせていた。

「ん？ どういって？」

薫は本気で分からないと言いたげに、呆けた顔をする。

エシユロスは髪をくしゃくしゃと掻き耑り苛立ちを露わにする。

「本当に分からないのか！ なら聞け！ 耳から血が出るまでかっ穿ってから聞け！ まず、運頼みな所だ！ 貴女は確かに言ったな？

衝撃が加わったら爆弾が爆発するかもしれない！ それが実際どうだ！ 思い切り衝撃が加わったぞ！ 爆発しなかったから良いものを、綱渡りにもほどがある！」

怒髪冠を衝くという言葉を顕すような勢いで怒鳴り散らすエシユロスに対して、薫は

「おーそーりー」

とまるで気持ちが入っていない謝罪をした。

茶化しているとも取れただろう。それがエシユロスを更にヒートアップさせた。

「それに！ なんだあのキラーパスは！ “私の歩数で十歩”だと！！

私が貴女の歩幅を分かっていなかったらどうするつもりだった!？」

薫はあーと少しばかり唸った後、

「だって、君こっち来たばっかりだから。メートル法もヤード・ポンド法も、多分だけど分らないだろうし」

と、指摘した。

エシユロスは瞬間、目を見開いた。

確かに、魔界と人間界では距離の測り方が違う。事実、人間界の単位で説明されてもエシユロスは困惑してしまっただろう。

「それに、エシユロスは、レディーファーストとか分かってる人だから。街や空港でも私のペースに併せてたから。屹度、私の歩幅も把握してると思ってた」

当たり前のように言っただけのける薫に、エシユロスは言葉を失う。

女性を大切にしようとしていたのも事実だ。薫を守り、また一人でも逃げられるような位置を保って歩いてきたのも事実だ。

だが、そんな自分を理解し、また信頼を置いてくれていたなどとは思わなかった。

顔が熱くなる。薫の顔を直視してられない。

「それにさ、万事上手く行ったわけだしね。文句は言いつ子無しだよ」
だが、朗らかに笑いかけてくる薫が、エシユロスは無性に気に入らなかつた。

「いや、これは大失敗だ」

だからそこははつきりとさせていかねばならないと思った。

「なんで？」

首を傾げる薫に、エシユロスは自分のシャツを脱いで肩に羽織らせ、

「貴女が——淑女（レディ）が肌を晒すことになった。これが大失敗でなくてなんだという？」

顔を伏せ、目を閉じた。

薫は目を瞬き、そして柔らかな笑みを浮かべる。

「少しだけ待っていてくれ。服を取ってくる」

そう言っただけでエシユロスは薫の服を拾おうと、薫に背を向け、薫のドレスが落ちている場所に向かって歩き出した。

その数瞬後——

「う……ぐ……」

幽かな呻き声がエシユロスの耳に届く。

口が乾く。喉が鳴る。胸が。どくどくと厭な高鳴り方をする。

「テメエら許さねえ！ぶっ殺してやる！」

叫号にエシユロスは勢いよく振り返った。

そこには破落戸の一人が、満身創痍になりながらも立ち上がった。いる姿があった！

手には拳大の球状の何かが握られている。

——爆弾……というヤツか！

エシユロスはそう判断するや否や、走り出していた。

「カオル、逃げろ！」

叫ぶエシユロス。

その先に見えたのは、

「えっ？」

辺りを包み込むほど強烈な黄褐の輝き。

更にその先には——。

「第五の術『グレイド』」

それを判断する暇もなく、薫の口から詠唱が放たれる。

——新しい術!? 出たのか!? だが、このタイミングで!?

エシユロスは困惑し、周章する。

基本的に、本に現れる術は使ってみるまで効果が分からない。それをぶっつけ本番それも、この切羽詰まった状況で使うなど有り得ないだろう。

だが、それを実際してしまつた以上は仕方がない。

——南無三ツ！

祈るようにエシユロスは地面に手を着き、男に術を定める。

濤——！

瞬間、音を立て泥が湧き上がり、爆弾を持った男に襲い掛かる。

「うわアアアア！」

泥の小波が男を呑み込み、そのまま締め上げていく。

「なんだこれ!? う、動けねえ！ピンに手が届かねえ！」

もがく男であったが、泥が纏わりつき一寸たりとも体が動かなかつた。

「体を泥で縛る呪文かあ。こういうのもあるんだね」

薫はその様子を見て呑気にそう評しながら、エシユロスに笑みを向けていた。

エシユロスは呆然と、術を出した体勢で固まり、沈黙する。

「エシユロス？」

薫が名前を呟くと、エシユロスは漸くゆっくりと正立し、ぼそりと呟く。

「晒っていた……」

と。

「どういうこと？」

薫が訊ねるとエシユロスは全身の血液が凍結したかのような青い顔をして、

「分かっていないのか？ 貴女は、さつき、晒っていたんだ」

と震えた声を絞り出す。

そう、薫は晒っていた。爆弾を目の当たりにし、死を間近に感じているであろうあの状況で。顔の筋肉が崩れ去ったようなあの笑顔を見せていたのだ。

その指摘を薫は鼻で笑う。

「何言ってるの？ あの状況で。そんなことあるわけない」

そう言い切った。

そう言い切れるから、薫は気が付けない。

薫を心配した少女。彼女に返した笑みにこそ、彼女が怖れていたということに――。

LEVEL 7：大事に思ってくれる人

「うーん」

飛行機が着陸した衝撃が愈々終わると、薫は大きく唸りながら伸びをし、窓から景色を見る。

キューバと日本——名古屋の空港の景色にはあまり違いはないように感じてくる。屹度、空港の発着場というのは何処の国でも同じなのだろうと思いつながら、薫は飛行機からぞろぞろと客が出ていくのを見送る。

その間、肩の凝りを覚えて自ら手を回して揉みしだく。ずっしりとした吐き気を催すような気怠さがある。身体の芯から這い出てくる微睡が、瞼を引き下ろそうとしてくる。シートに体が縫い付けられているかのように体が動かない。また、動きたいとも思えない。

「おろっ？」

凶らずも間抜けな声が上げると、薫はやっと自分が疲れているのを認識した。

メキシコシティ経由でキューバから中部国際空港までは、トータルで凡そ15時間のフライトとなり、それだけでも疲労は相当なものになる。

加えて薫には疲れを溜めこんでしまうだけの理由があった。三日ほど警察署に拘留されていたのだ。

あのハイジャックの後、薫を乗せた飛行機はキューバに引き返し、エシユロスに昏倒させられたテロリストもどきは敢え無く御用となった。が、これにて一件落着、あとは日本へ帰るだけ——とはならなかった。

彼等の鎮圧の為に薫とエシユロスが起こしたことの数々があまりに派手すぎた為に事情聴取を受ける羽目になったのである。危機的状況の打破にのみ頭が一杯になり、その後のことを薫はまるで考えていなかったのだ。キューバの警官による、根掘り葉掘りの取り調べ。それら全てに上手い言い訳を考えながら返すことは、薫にとつて多大な苦痛となった。

エシユロスはというと、事が片付くや否や、貨物室に逃げ込みまた石像に化けた為に、何を逃れることに成功していた。仮に警察に捕まり事情聴取でも受けようものならば、入国ビザ無し不法滞在者、さらに戸籍無しの胡乱な存在として大問題になっていただろう。その過程で人間ではないこともばれるかもしれない。そういう意味でエシユロスの判断はまさしく英断であった……その所為で証拠物扱いを受け、警察署に領置されることになってしまったが。

「おっと、うっかりエシユロスのことを忘れかけるところだった」

薫は思い出したように眩き、億劫そうに立ち上がると、到着出口にのらりくらりと向かう。

そこに着くと、飛行機に乗せた乗客の荷物がベルトコンベヤーに乗って流れてくる、空港では馴染の光景が広がっていた。

彼女の荷物は大き目の麻袋で包まれた石像が縄で括りつけられた、ピンクのトランク。無論、麻布に入っているのがエシユロスである。

薫が見る限り、それはまだ流れて来てはいなかった。

——結構無茶をさせちゃったからな。何か奢ってあげよう。

中部国際空港——通称セントレア内のショッピングモールは相当な広さであり、一日そこで遊んでいられると評判である。中部国際空港に行つて帰つてくるだけのツアーなどというものが存在している程だ。

大人ぶりたい年頃で、また実際大人びているエシユロスにも気に入る物があるだろう。

色々を見て回るのも悪くないかもしれない。

そんなことをかんがえていると——。

とるるるるう……とるるるるう……とるるるるう……。

と、手提げ鞆から音がして薫はそこに手を伸ばした。

携帯が着信を告げていたのだ。

一体、誰だろうと名前を見た瞬間、

「あ」

薫は脱力した声を漏らす。

携帯の着信に気を取られている間に、エシユロス付きの薫の荷物は

ベルトコンベヤーを一周し、闇へと吸い込まれてしまったのだ。

†

日本の三大都市といえば、東京、大阪、そして名古屋である。そんな三大都市の一つにあり、また海外への窓口となっている場所ということもあり、セントレアのショッピングモールは海の砂より多くの人が行き交っていた。そんな中で一際目立つ少年がベンチに座っている。

絹のような白い肌、*“黄金”*と名状されるべき美しいブロンドの髪、蒼穹色の瞳、あからさまな程に整った顔——を不機嫌そうに歪めた十代ばかりの育ちが良さそうな少年である。

然も、その隣にどう見ても親や姉には見えない、コケティッシュでありながらアンニュイな見目の如何にも東洋人と美女がいるものだから、その注目はより強烈なものとなってしまっている。

「ねえ、エシユロス」

そんな雰囲気を全く以て察していないのか、物憂げな雰囲気的美女——薫は気にせず少年に呼び掛ける。併し、少年——エシユロスは相も変わらず顰め面のまま女の顔も見ずに、*“沈黙”*を返すばかりだった。

「もう、ごめんってば。スルーしちゃったのは、あれはワザとじゃないんだ。だからさ、機嫌治して、ね？」

その言葉に、エシユロスはちらりと薫の方を向くと、

「……私がどれだけ辛かったか、貴女に分かるか？」

と冷たく言い放った。

薫は、あはははと乾いた笑声を上げる。

エシユロスが不機嫌なのは、漸く終わると思われた変身が続けることになった所為であった。長時間の変身は多大な疲労を伴うのである。

エシユロスにしてみれば、フルマラソンを死に身の思いで完走したと思っただけ、『あと百メートル走って貰います』と告げられるようなものだ。

「うん、よく分かるよ。だから、ねぎらってあげる」

薫はエシユロスに微笑みかけた。

エシユロスはまた振り向きつつ、薫の顔を見て、

——こういう笑顔は素敵なのだが。

と、感想を抱く。

二度の戦いの時に浮かべた笑みと比べて。

「エシユロス？」

「……なんでもない。それより、ねぎらうというのは？」

「なんか好きなものを買ってあげよう。服でもアクセサリーでも、なんでも構わないよ」

その提案にエシユロスは、否と、首を横に振った。

「折角だが、丁重に断らせていただく。淑女（レディ）にそこまでして貰うのは、私の主義（ポリシー）に反する」

薫は内心で『やつぱりそうきたか』と納得していた。

キューバや空港で薫に食事を奢って貰うことすら、『魔物は食事を採らなくて良い』『腹の調子が優れない』などとあれこれ理由を付けて断ろうとした程だ。最終的に、『薫が食べきれなかったものを処理して貰う』という体で食事をさせたが、それでも『いつかこの施しに対する埋め合わせはきちんとさせて貰う』などと言いつつ始末だ。

エシユロスは女性に対して極端に甘え下手であったのだ。

「じゃあ、男の財布なら良いわけだね」

そこで薫は逆に考えた。

——男なら良いさ、と。

「おいおい、リーサ。来て早々、オレに奢らせようつてのかよ」

そんな彼女の提案に横合いから物言いが入る。

テノールながらに落ち着いた、若い男の声であった。

エシユロスは其方を振り向く。

二人の座るベンチの前に背の高い細身の男が立っていた。

銀縁の眼鏡を掛けたインテリジェンスを感じさせる美男子であった。真ん中できつちりと分けた黒髪は整髪料で艶めいていて、見る人が見れば、出世街道を歩む官僚と見えただろう。けれど、モード系の細身のダークスーツ、紫色のシャツ、チャコールグレーのナロウタイ

といった格好が、彼から連想できる職業をぼやけさせていた。

「てか、なんだその餓鬼は。手前の知り合いか？」

その男性は、あけすけに薫に訊ねる。それも気にせず薫は、
「いろ？」

と笑顔で返す。

男は呆れた顔をした。

「……分かり易い嘘をつくなくなっつーの。てか、それがホントならオレは善良な市民としてお前を通報しなきゃならなくなるだろう」

「それ、やの付く自由業って立場、分かって言ってるの？」

「職業差別はいかんだろ、リーサ」

憎まれ口を叩き合い乍らも、そこに和を感じさせる二人に、エシユロスは一入蚊帳の外に置かれ、プルプルと身震いし、

「いきなり来てなんなんだ！ 貴方は！」

と怒鳴り声を上げた。

すると、男は目と口を丸くしてoopsと呟く。

「すまん、自己紹介がまだだった」

そして、彼はエシユロスに手を差し出す。

「檀龍一。コイツの……まあ、なんだ。あれこれ世話を焼いてやっける親切なお兄さんってところだ。よろしくな」

柔らかな笑みを浮かべる男——檀龍一の手を取るとエシユロスは、

「ダン氏……成程、話には聞いていた。カオルを拾った女衛の男性だろう？」

と快活な笑みを返した。

「女衛って、お前……」

苦笑するダンに薫は、

「その言い方も間違っていないでしょ。実際、私をそっちの世界に案内したのはダンさんなわけだしね」

と追撃を入れる。

がくりと、ダンのはあからさまなほど項垂れる。

「お前ら、仲良く性格悪いな」

二人に対して率直な感想を述べると、ダンは顔を覆うようにして右

手の中指を眉間に当てる。沈黙が流れる。

そして、その手が外れる。

「……なんか余計にその餓鬼が気になって来た」

ダンの瞳はじつとエシユロスを見下ろしていた。

エシユロスは何やら喉に引つ掛かるものを覚える。一体それがなんであるのか。

それに思い至れぬまま、

「そこで飯でも食いながら話そうか」

とダンに促され、フードコートの一角へと案内される。

†

「……おい、カオル。それはなんだ？」

最後に給された薫のオーダーした料理を見て、エシユロスは絶句した。

ダンに案内されたのは「我道」という名のラーメン屋であり、魔界から人間界に来てまだ間もないエシユロスはラーメンを見るのも食べるのも初めてである。

だが、それでも。自分が頼んだ醤油ラーメンや、龍一が頼んだ味噌ラーメンと、薫が頼んだモノが全く別の類の代物であるのは手に取るように分かった。

「担々麺っていうんだよ、エシユロス」

隣に座る薫がそう説明した物体は、エシユロスにとっては食べ物というよりも魔道兵器に感ぜられた。まず、色が違う。赤い。スープも、麺も、具の一つ一つに至るまで総てがルビーよりも紅蓮に染まっている。思わずエシユロスは目を瞑り、鼻を塞いだ。それがあるだけで、鼻と目の粘膜を抉られるような異常な痛みを起こしたからだ。危険だ。ボコボコと不自然な沸騰を繰り返しながら、真っ赤な瘡気を漂わせるこれが食べ物で良い筈がない。

兵器だ。食ったら食われる。エシユロスは本能でそれを理解した。

——おい、ダン。担々麺ってなんだ。人間はこんなものを食べているのか？

エシユロスは向かい合うように座っているダンに目で訴える。

「驚いたか？ まあ、普通驚くよな。こんなマグマみてえな食いモン見せられたらよ……」

げんなりとした表情でそう弱弱しく語るダンはエシユロスの訴えを半分も理解していなかった。

だが、エシユロスは安堵した。人間の感性でも、これが異常だということに。自分の中で湧き上がる恐怖が、正常だということに。

「ダンさん、大丈夫？ 顔色、悪いよ？」

そう訊ねつつも薫は、何処からか取り出した “DEATH SAUCE” と書かれた赤い液体の入った瓶を取り出し、それを丸々一本ぶち込んだ。

「ぎゃあああああ！ ヤメロ、ヤメロ、ヤメロ！ それは流石にグロイぞ！」

ダンの断末魔が店内に木霊する。

それを尻目に薫は、グロテスクとまで評された超魔道兵器 “担々麵” を嬉々として啜っている。

まさしく、地獄絵図だ。

エシユロスはそう思いながらラーメンを啜った。

舌の中に広がる旨味とコクの調和が見事であるということのみが、エシユロスにとって唯一の救いだった。

「……あのさ、いい加減慣れたら？ というか、私の好み、知っててこの店選んだんだよね？」

「我ながら本気で後悔してる」

じつとりと湿った視線を薫に送られるダンは最早気の毒としか言いようがなかった。

そもそも、ダンはハイジャックに巻き込まれた薫を心配し空港まで迎えに来たのである。勿論、食事も奢るつもりで。

それがこの正気を保てなくなるような席である。然も予め、こういうことも覚悟した上でこうなっているのだから、エシユロスは彼を本気で哀れに思う。

加えて、これが薫の食事の常態であるという事実には頭痛を覚える。エシユロスの前で薫は飲みこそすれ、食べはしなかったから、エシユ

ロスは彼女がどのような味覚の持ち主か知り得る機会はなかった。というよりも、別段と気に掛けるようなことでもないと考えていたのだ。

——それがどうだ、この惨劇だ。

エシユロスは心の中で毒づいた。

「……というか、これからずっと、この有様を見続けなきゃならないのか」

ラーメンと一緒に頼んだ餃子に手を伸ばしながら、エシユロスは知らず知らずのうちにそんな言葉を零す。

「これから？」

何気ない言葉に反応し、ダンがラーメンから顔を外した。

「なんか聞き捨てならない言葉を聞いた気がするが……。というか、リーサ。このエシユロスつー餓鬼は何者なんだよ？」

薫の食事に気を取られていたダンは、漸く本題に切り込む。

エシユロスはそぞろ気に薫を見つめた。

魔物のことも、王を決める戦いのことも部外者に話せるようなことではない。そもそも信じられるような話ではない上、真実であることを証明してみせたとしても、薫の周りの人間は戦いから遠ざけるかもしれない。

王を決める戦いでもなければ——魔物は、愛する者を戦から遠ざけようとする者がマジヨリテイだろう。

畢竟、そういうことなのだ。この戦いは魔物の子達からすれば「名誉」であるが、巻き込まれる人間からすれば御免被りたい「災害」でしかないのだから。

「うーん、そうだね。なんと言ったら良いか……」

言い淀む薫に、エシユロスは大きな不安を覚える。

無論のこと、このような場面に對する上手い言い訳を話し合う——などということをしている筈もない。

バクバクとした、厭な胸の高鳴りの中、エシユロスが聞いた答えは、

「うん。きつき言った通り、いろいろってというのが正しいかも」

というラーメンのスープにうっかり顔を付けてしまいそうな、斜め

上の回答であった。

ダンも胡乱そうに右眉を吊り上げている。

「それ、マジで言ってるの？」

エシユロスもダンと同じことを言いたい衝動に駆られたが、薫は満面の笑みで、

「勿論」

と迷いもなく返した。

成人した大人の女性が年端もいかなない少年を愛人として困う。魔物であるエシユロスにも、それが途轍もなく拙いことだと理解した。実際、法制度が整った多くの国で犯罪とされる事案である。

だから、龍一は顔を歪めたのだ。

「そもそも、どうやって出会ったんだよ、その餓鬼と」

「聞きたいの？」

「……赤道直下（キューバ）まで行ってそんな色の白い良いところのボンっぽいのを拾ってくりや気にもなるだろうが」

その追及に対する“設定”は出来ているのかと、エシユロスは気にかかる。

しかし、それは杞憂に終わった。

「捨てられてた」

薫は間髪入れずに言葉を繋ぐ。

「捨てられてたって……」

「そのまんまの意味。向こうの街の……パン屋さんの前だっけか？」

そこで蹲ってたの。と……」

あまりの内容に眩暈を覚えるダンに薫は身を乗り出して耳を傾けるように促す。

「なんだ？」

と、言った通りに身を乗り出すダンに薫は耳打ちした。

「この子、家族旅行の序でに置き去りにされたみたいなんだ」

「なっ!?」

言葉を失い、目を見開くダンから薫は顔を離すと、口角を和らげる。「で、顔とか肌とか綺麗だし、将来有望そうな感じなので……そういう

事情ならば困ってしまおうかと」

「その流れで如何してそうなった」

傍で聞いていたエシユロスもダンと同意見である。
如何してそうなったのか、と。

「はあ」

ダンは呆れたような溜息を吐くと、薫に向き直る。

「リーサ……いや、薫、お前さ……」

その顔は実に神妙であった。

一体何を言い出すのかとエシユロスが思っていると――
「勝手にペット拾って来たら駄目……ってのは常識だぞ？」

ヤクザの若頭が素っ頓狂なことを言い出した。

「おい、ちよつと待て！ 俺の扱い！」

エシユロスはダンの言葉に訴えを起こす。

「ペットというとてもいかがわしい響きだから、やめてくれないかな？」

「そこじゃねえよ！ 突っ込むべきところは！」

「エシユロスのアメル？ ごめん、そういうのはちよつと……。こつちが、だったら吝かでないのだけれど」

「いや、それも違うから！ というか、アメルってなんだよ!？」

「えつとね……」

「やっぱり言わなくて良いです！」

ぜえと、エシユロスは荒く息継ぎをした。

自分のペースでその上、恐らく猥談。相当に堪えるものがあつた。
「前だの後ろだの、そこまで進んでんのな」

器を盃のように持って、ダンは豪快にラーメンのスープを啜る。

「うん。こういうの自分で言うのは恥ずかしいけど、とても仲睦まじいです。私、かなり本気です。この人と添い遂げたいと思つています」

薫は真剣な顔をしてダンを見つめた。

くしやりと、ダンは髪を筆るように頭を抑える。

「拾った餓鬼、ねえ……」

そう感慨深げに呟くと、ダンは一瞬押し黙る。
長い、長い、沈黙の後、

「……まあ、捕まらねえように愛し合ってくれば此方としては別に良いつて感じなんだがな。ホント、マジでウチの組には迷惑かけんよ」

素っ気なく、けれど優しさの籠った柔らかい声色でダンはそう返答した。

菩薩のような、幽かな微笑みを浮かべて。

「有難う御座います、お父さん！」

「それがホントなら、俺は幼稚園児の時に女を孕ませてたことになるな」

「少し早熟な子だったんだね。ところで有難う序でにもう一つ良い？」

「少しのレベルか、それは。何だ言ってみろ」

薫はエシユロスの肩に手を回して、

「この子の為に、一寸戸籍を見繕ってくれないかな？」

と願いだした。

エシユロスにとって一番欲しいものであった。魔界の王を決める戦いは人間界の全土で行われる。

積極的に候補者を消しに行こうと思えば、必然、飛行機に乗る機会は増えるわけだ。パスポートの申請には、当然“身分証”が必要であるため人間界での戸籍は必定となる。

……正直、エシユロスは荷物として渡航するのはもうあれで終わりにしたいと思っていた。肩が凝るのである。

「あ？ 戸籍？ 別に用意できるが、如何して？」

「私、この子を離したくないんだ。……平気で子供を手放す親の元になんて返したくない」

「詰り、もし親が世間体かなんか気にして連れ戻しに来た時に、“この子はアナタ達の子供じゃないですよ”と言い切れるだけの免罪符が欲しい、と。そういうわけかい？」

「流石、ダンさん。よくぞ察してくれた」

ダンはずいぶん深いため息をした。

そして、肩をこきりと鳴らすと、

「……分かった。近いうちに用意してやる」

とやけくそ気味に言い放つ。

「有難う……うん、本当にいつも世話になりっぱなしだね」

「気にすんな。ビジネスへの投資は惜しまない主義でな。店で働く女の世話もその一環ってやつだ」

それらしい返し方をしているが、その中には、確かに薫に対する情があつた。

エシユロスはそれを見て取って、知らず知らずのうちに微笑みを浮かべていた。

—— “大事な人はいない” か……。だが、貴方のことを大事な人はちゃんといるんだな。

そう、安心して。

幕間

食事の後、一時間ほどショッピングを楽しんだ一行は薫の自宅へと向かうために、ダンの車に乗り込んだ。

“ディーノ”と呼称されたシャープなボディーが特徴的な赤い車である。

……如何やら、この車をダンは甚く気に入っているようで、鼻歌交じりで機嫌が良さそうにハイウェイを運転していた。それを指し示すかのように、車の速度計は法定速度をとつくの昔に振り切っている。

全開にしている窓が、外気を一気に呑み込んでいく。今、見たと思った景色がどんどん後ろへ遠ざかる。

疾い。兎に角、疾い。

「どうだ、エシユロス。俺の車の乗り心地は？」

ふとダンは、助手席に座るエシユロスに声を掛ける。

「悪くない」

短く、素っ気なさげに返したエシユロスは、その実、ダンに買った貰った濃いブラウンのサングラスの向こう側を緩やかに細めていた。

座り心地の良いシート、頬を激しく撫でつけていく風。

総てが最高であった。

「というよりも。ダンさんの車って“A4”じゃなかったっけ？」

後部座席の真ん中に陣取って煙草を吹かしていた薫が、ふと煙草を離してそう訊ねる。

「言っただけだったか？ 俺、車が好きだよ。何台か持って、その日の気分で色々乗り回してんだよ」

但し、総てなんらかの理由で廃棄になった車を自ら修理したりサイクル製品であるともダンは補足する。

“なんらかの理由”には、うっかり人を撥ねてしまった大物議員が処分に困って……などという詳細をあまり聞きたくないようなものも多々あった。

「“やくざ”……というのは、色々やるのだな」

その車に纏わるエピソードの大半が仕事絡みの案件で手に入れた代物で、その仕事の内容が多岐に渡ることを受けてエシユロスは感嘆の声を漏らした。

「『暴力団』って言っても、近頃じゃ『ヴァイオレンス』でしのぎは立てられねえ。専ら『インテリジェンス』がしのぎになる。だから色々出来るんだよ、今の極道つてのはな」

そう言うのとフツと小さく笑うとダンは運転席の窓を開ける。そして、胸ポケットから『RONSON』と書かれたクラシカルな意匠の金色のオイルライターと、黒い紙巻の煙草を一本取り出す。

片手で器用にハンドルを操作しながら煙草を銜え、火を点けると、そのまま一度、紫煙を吐き出した。

チョコレートのような独特な甘い香りを残しながら、薄らと白い靄が置き去りになっていく。

「そうなのか」

それを呆と、横目で見ながらエシユロスはなんとなく納得したような声を出した。

すると、後ろから

「今の極道つていうより、ダンさんは特別色々出来るんだけどね」

と薫が口を挟む。

「私の働いてる『PARADISE LOST』の他に、キャバとかガールズバーとか色々お店経営して、全部成功させてるし。資格も一杯持つてる。私にも勉強とか教養とか色々教えてくれた」

「勉強まで……それは凄いな」

エシユロスのいた魔界にも、犯罪などの『悪』を生業として生きる無法者はいた。

だが、その殆どは、インテリジェンスなどという言葉には無縁の無頼でしかなかった。

やくざという職業は此の世界に於いて褒められるような職種ではないと聞きエシユロスは最初そういったアウトローを想像したが如何にもダンという男は違うのだと感じ始める。

「……テメエが俺を褒めるなんざ、珍しいこともあるもんだな、リー

サ」

「ん？ いつもこき使ってばっかだからね。ちょっとくらいねぎらつてるつもり」

「言葉のみ、て。それを人は偽善というんだぜ？」

「ッやらない善よりやる偽善」 って言葉もある」

薫の減らず口にダンはヘツと皮肉めいた笑みを零すと、車載の灰皿に擦り切れた煙草を押しあてた。

その掛け合いが妙に息が合っている様に見えるエシユロスはムツと二人を凝視する。

何処か通じ合っているような雰囲気。薫を拾ったのはダンであり、また彼女に様々な知識を与えていたのも彼という事実。

故に二人の関係を邪推してしまう。

「男の嫉妬は見苦しいぜ？」

少しばかりエシユロスの方を向きながら、ダンはずいぶん煙草に火を点ける。

「てか、俺とコイツはそういう関係だったことはねえから。安心しろや、彼氏さん？」

横目にウインクをしながら煙を吐くダンを見て、エシユロスは自分と薫がそういう設定になっていたことを忘れかけていたことを自覚する。

故に、

「いや、そういうことではないんだ」

薫とダンの関係を何か特別に羨望するということは在り得ないのである。

ただ、エシユロスは気になっていたのだ。

「……彼女と近い関係のようだったから。だから屹度、今までのカオルをよく知っているのかと思って」

それはとても大事なことであったから。

「だから、もしそうなら教えて欲しいと思ったんだ。私は『今』と『これから』のカオルしか知り得ないから」

本の持ち主（パートナー）のことを知る。

人間界に降りて薫と出会うまでは如何でも良いと思っていたことはエシユロスにとつてその重要性を強めていた。

惧れがあった。恐れがあった。

薫が見せた笑顔の正体が分からない儘ではいけないと思うようになっていた。

過去を知れば何か分かることがあるかもしれない。

そう思って、口にした質問の回答は、

「というか、エシユロス。それ、私に直接聞いたら？」

身を乗り出して、パートナーに笑顔を向ける薫自身によつてもみ消される。

エシユロスもまた、

「それもそうだな」

と笑顔を返す。

「じゃあ、今度色々聞かせてくれ」

そう言いつつエシユロスは、薫自身に聞く気はまるでなかった。

屹度、誤魔化される。然も、薫は尋常な顔をして嘘を吐ける。吐かれてしまった方にしてみれば、それを真実と見極める事は不可能であるほどだ。

だから、真実はダンから聞き出さなければならぬ。

そして、今聞き出すつもりもエシユロスの中にはない。薫を交えてでは有耶無耶にされてしまう可能性もあるかもしれない。

……そこまで考えられているのに、如何して今この場面で聞き出そうなどというチョンボも良いところな選択肢が生まれたのかエシユロス自身には分からなかった。

その答えを知るのもう少し後になる。

そのような出来事があった薫の自宅までの車内。

その後は、ダンが経営するバーで働いている進一という青年の恋がどこまで進展したとか、それについてはあまり話せないとか、取り止めの無い話が続いて――。

鬼松市中央区、駅近く、五十階建てマンションの四十八階。薫の住まいが見えた辺りで、

「あ、リーサ。お前、今日と明日、休みな。名目上、大事を取つてということで」

と最後にさらりとそんなことをダンが告げてきた。

彼氏に日本のこと教えてやんなど、実際まるで不要な気遣いを見せて。

LEVEL 8：タタリ神く愛情たつぷり幸せご飯く

石畳の道を踏みつける、青年の歩き方をどれだけの人が不自然だと評するだろうか。

否、屹度、まず彼の容貌に目が行ってそこに敢えて注目するということはしないだろう。ハーレクイン小説の表紙の中で美女を抱きしめる美男子という構図はよくあるが、この男はまさにその『美男子』の典型といふべき顔立ちをしていた。まるで長らく中東で過ごしたかのように浅黒い肌とそれとコントラストを成す白い髪と相まって相当に目立つ。見目から想定される年齢はまだ精々20代の半ばかり後半であるというのに、純白のダブルスーツという装いも彼を浮世離れさせる要素であった。

そして、次に注目されるべきは、兄妹や親子には到底見えないおかつぱ頭の少女を連れていることと、砂時計のような模様が表紙に刻まれた江戸紫色の分厚い本を抱えていることであろうか。

故に、『歩き方』が注視されるということがないのだ。精々、すらりとした長身を更に大きく見せている、背筋が伸びた洗礼され過ぎている歩き姿であると思うまでが堰の山だ。

——鱧皮という明らかに固い素材で出来た靴で石造の道を踏みつけているというのに、足音が一切しないことには誰も気に留めずらしい。

そもそも、隣に立つ少女の所為で男の足音の確認など不可能なので。

カランコロンと喧しい音が少女の足元から齎されているのだ。イスはアツペンツェルの街にはまるで似つかわしくない、朱漆塗りの下駄が奏でる調べ。

青年の腰に頭の頂が届くか如何かといった小さな少女は和装であった。董が描かれた淡い紫色の着物と藍色の袴——日本の明治・大正頃の女学生風ともいふべき恰好であった。

目を瞑っているせいでその全貌は分からないが、淡雪を思わせる純白の肌と『完全』とでも表現するのが似つかわしい。パーツの一つ一

つが美を予感させる。

呂色の髪に綺羅と映えるチャロアイトのような淡い紫の石で出来た紫陽花を象った髪留めが印象的である。

「なあ、まだ着かへんの？」

青年の速い歩調に合わせ、忙しくカラコロと音を鳴らしながら、少女は不満げに問い掛けた。

「まだだ」

青年は素っ気なく返した。

ムヌウと、少女は頬を膨れさせつつも、歩き続ける。

怪しげで官能的な甘い香りを振りまきながら。

中世後期頃から時の流れが停滞したかのような趣の街を奇天烈な二人組が歩いていく。

落ち着いた空間では余りに浮いている筈の存在である。なのに、人々は誰も、そもそも初めから目に映ってすらいなかのようになってしまう。至って平静である。

ならば、この二人に纏わる異様さに気が付く可能性は零に収束するだろう。

——足音がまるでしない男に、目を瞑ったまま彼の体に触れることなく着いて行く少女。『気持ち悪い』と吐き捨てる以外にないのに。

知られざる怪奇を振りまいて暫く、二人の歩みは停止した。

「ここだ。もう目を開けても良い」

青年の言葉に少女は黒目がちな滅紫色の双眸を開く。まず蔓が巻き付いて、元がどのような創りであったか判然としない門が映った。そして、その更に奥にあるものを見て、

「わあ、綺麗やねえ」

少女は俗に白目と呼ばれる箇所がまるで無い眼を大きく開いて、驚嘆する。

赤、白、黄、桃、燈の色とりどりの薔薇、プベスケンス、サルビア、カーネーション、ジプソフィラ、アルストロメリア、スターチス——。様々な花の色が匂う、美しい花園がそこにはあった。

バーネット夫人の『秘密の花園』。あの物語のような奇跡が起

こつてもおかしくはないと少女に思わせる程に余りに輝いて見える花園が。

光る風に揺れながらシャロンの樹が歓迎するかのようにさわさわと笑い声を上げる。

枝に吊るされたバードテーブルには花鶏(あとり)が集まっていた。白い蝶達はひらひらと舞い遊んでいる。

「リッチ、これえ、見せたかったん？」

少女は男の顔を見上げた。

「そうだ」

「リッチ」と呼ばれた男は虚無的な笑みを零した。

「アヤメは女の子だろう？ 蝶や花を愛するのは、性の筈だ……と、思ってたね」

「そういうんはよう分からんけど、こつつおもろいわ。おおきにな」

少女——アヤメは輝かんばかりの笑みを返す。

「有難う。ケリイ……この花園の持ち主も喜ぶだろう」

そうリッチが謝意を示した一方で、ふと横眼をやると、アヤメはそわそわと所在なさげに辺りを見渡していた。

「……もつと色々見て回ったらどうだ？ 遊びたいのだろう？」

「ええん？」

「君が望むならな」

リッチの言葉を聞くや否や、アヤメはわあと声を上げて、跳ねるように駆け出した。

それと共に草と花卉がひようと舞い上がる。

「あまりはしやぐと転ぶぞ」

そんなリッチのいさめも聞こえていないのか、アヤメはひっそりと咲く空色のチューリップに向かって突進していった。

「ええなあ。綺麗やわあ。心が毬やわあ。ぽんぽん弾むで」

うつとりと頬を紅潮させ顔を綻ばせるアヤメを見て、柔らかく笑いながらリッチは彼女に歩み寄る。

「君は本当に、見せがみというか、そういうものを感じさせるような反応をするな」

「かて、おもしろいもんはおもしろいんやもん。どしたらええんちゆうねん」

「……そう本気で言える君はとても幸せなんだろうな」

ふとリツチが漏らした言葉に、アヤメは顔をくしゃくしゃに破顔させた。

「せや。ウチ、ほんまに幸せなんや。おもしろいもんが一杯あつて。こないな世界におうて。ごっつ幸せなんや」

フツとリツチは小さく皮肉気な笑みを零した。

「もつと幸せになりたいと思わないか？」

突然の問い掛けに、アヤメはきよとんとした表情でリツチの顔を見つめる。

無限の螺旋を描く不可思議な彼の瞳の、さらにその奥を。

「……もつとおもしろいもん見してくれるん？」

アヤメの問いにリツチは小さく首を振る。

——否、と。

「『面白い事もなき世を面白くすみなすものは心なりけり』——と、言つてね」

「どないな意味？」

「世界がどういったものであるか、その総ては自身に依る。と、いう意味だ」

彼の言わんとする意味を測りかね、アヤメは唸り声を上げた。

「おもしろくなるんか如何かはウチにかかちよるいうこと？」

リツチは首肯する。

「然り。『蠱毒の紫』よ。働きという意味でも、感じ方という意味でも。私が如何なるものを示そうと、君がそういう姿勢でいなければ途端につまらなくなる」

その言葉にアヤメはクスクスとせせら笑いを上げた。

「リツチはウチにその気がないとも思つとるん？　せやつたら、ウチいシヨックで泣きそうやわ」

そう言いながらも、アヤメの瞳は細められていた。逆さまの弓のよなそれが空想石（タンザナイト）のような奇怪な輝きを放つ。

「で、リッチは『如何なるもの』を示してくれるん？ かで、ウチおうじようするんや。ウチにとつちや、此ン世はいかいな玉手箱みたいなモンやさかい。なんば選んでええか分さかいへんのや」
廻る、光を呑んで。

燕子花（アヤメ）の紫は、合わせ鏡が成すような無限螺旋の獅子の眼へ。

刹那、大きく裂けた獅子の口が答えを齎した。

「『心』だ」

自らの胸を指し示して。

「私達は『心』を見に行く」

その時、『蠱毒』と呼ばれた少女の口に三日月が生じた。

†

「……は……？」

所変わり、日本・鬼松市中区砂岡町、『ロビンソン砂岡』。

J R 鬼松駅にほど近いこのマンションの四十八階。

その部屋の一室にて、空が漸く白み始めた頃、エシユロスは目覚めた。

本の持ち主（パートナー）の家で暮らし始め、迎える二度目の朝。未だに天井に『見覚え』を抱けず、図らずもエシユロスはそう漏らしていた。

ワインレッドのシンプルなデザインのカーテンの、その隙間から漏れる僅かな光。それを頼りにするだけでもよく分かる程、白い筈の天井は黄ばんでいた。壁紙も同様である。

恐らくこれが原因だろうと、エシユロスは枕元を見る。吸殻で山盛りになった灰皿があった。

畢竟、煙草のヤニである。

薫はヘビースモーカーであった。禁煙が義務付けられている場所以外では、気が付くと吸っているほどである。

漫画を含む本の類の多さ以外に取り立てて言うことのないそこそ

ここに散らかった部屋。その中において途轍もない存在感を放つのが脂の臭気である。

この部屋に存在するあらゆるものに染み付いて、剥がれる事はない。

しかし、エシユロスは不快感を抱くことはなかった。寧ろ、不自然なほどの安心感に包まれる程だ。

それよりも目下問題にすべきは――。

「苦しい……」

と、つい口に出してしまいたくなる首を絞めつける薫の腕である。身動きが取れないくらい、がっちりとホールディングされている。然う――エシユロスは薫と同じベッドで寝ているのだ。

曰く、『人の体温を感じていないと眠りが浅くなる』らしい。エシユロスはそれを胡乱じたが、何やら立て込んでいるらしいダンに薫が電話を入れて確認してみせた所『事実』であることが証明されてしまった。

ともすれば取るべき手段は只一つ。成すがままだ。

睡眠は大事だ。体の働き、頭脳の働き、見目に纏わる諸々に関わってくる。三番目に至っては女性にとっては死活問題であろう。ならば、エシユロスに断ることが出来るものか。

……とはいえ、この決断がエシユロスに与えたダメージは余りにも大きすぎた。

前述した苦しさもさることながら、背中に当たる柔らかな感触。豊かさの象徴、とどのつまり乳房である。薫のものは、超質量兵器とも名状するのが相応しいほどの代物である。それを押し付けられるのは、年頃のエシユロスにとってしてみれば精神衛生上最悪としか言えなかった。

それを暗に示す様に、胸が不穏な程高鳴っているのがエシユロスにはよく分かった。

――唯一救いは、カオルの寝巻が『ジャージ』とかいう地味で肌が隠れるものだということか。

実際問題、訴えに来ているのは『視覚』ではなく『触覚』であるか

ら雀の涙程度の救いであるのだが。

しかし、ネグリジエのような透けて見えるような服装で背後に居られたら心臓が爆裂してもおかしくない。否応なく想像してしまいかねない。エシユロスでなくとも、恐らく男であれば誰でも。

「……抜け出そう」

エシユロスは人知れず呟いた。

こんな状況下で尋常を保っていられる筈もない。三十六計逃げるに如かず。

そもそも、彼には今やらねばならぬことがあるのだから。

†

魔界に居た頃に練習していた縄抜けの要領で関節を外し、薫の腕からあつかりと脱出するとエシユロスは台所に立っていた。

服装はエプロン。花柄である。本来薫のものである為に、明らかにサイズが合っていない。

エシユロスがやらねばならぬこととは料理であった。

では何故、料理をやらねばならないのか。それは、この二日で分かった薫のことに由来する。

——薫について分かったこと。

“THE IDOLM@STER”なるゲームに於いて“水瀬伊織”のプロデューサーであること。“デジモンアドベンチャー”というアニメが大好きで、特に“太刀川ミミ”という人物に思い入れがあるということ。歌うことが趣味であり“カラオケ”なる店によく行くということ。また、歌が上手いということ。目が悪く、家にいる時は眼鏡を掛けているということ。

そして、過去に纏わることについて。

——道端を歩けば何処にだって転がっているような不幸話だよ？
全く面白くなく、うんざりするほど月並みな。それでも聞きたい？
そう微笑しながら語った話は、彼女が中学生の頃にまで遡る。両親を失くし、身寄りが無かった為に施設に預けられた薫はそこで“虐待”を受けた。それに耐え兼ねて或る日施設を脱走。そこでダンと出会い、教育を受けそして娼婦となり現在に至る。

大凡、こんな話である。

……そんな生活を送っていたせいだろうか。満足に料理などする機会はなかったのだろう。エシユロスが思うに、薫は料理が出来ない。

その証拠に、此処二日の食事は全て、〃コンビニ〃や〃スーパー〃といった場所で買える出来合いのものか、レストランでの外食であった。

多くこういった食べ物に於いては嗜好性に重きが置かれている。要するに塩分や脂肪分が過多である場合が多いのだ。魔界でも人間界でもその辺りは変わらなかった。

別にエシユロスはそういった食べ物を否定したいわけではない。実際既に〃セブンイレブン〃の〃揚げ鳥〃はエシユロスのお気に入りである。

だが、毎日食すことが体の調子を損なうことは目に見えている。

——あれだけ煙草を吸うんだ。食事くらいは労わってやらねば……。

というのが、エシユロスが抱いた思い。そう思ったが吉日、台所に立っていたというわけだ。

無論、女を前線に立たせ、その上で女に住まで保証して貰い、それでいて何もしないというのはエシユロスのプライドに関わる問題だった、というのもあるが。

「……さて、何はともあれ It's cooking time! 先ずは食べ物の在庫を確かめるか!」

此処に食べ物があると薫に教えられた冷蔵庫の中身を確かめる。

……ライムにレモンやハーブに炭酸水。その殆どが酒に用いると思われるものだった。

そんな中で見つけることが出来た卵と幾つかの調味料。

——オムレット。あれが作れるのではないか?

正直エシユロス自身料理などしたことはない為、この発想は完全に勘に因る。

「まあ何とかなるだろう。なんとって私はエリートなんだ。料理くら

い、如何ということはない」

この時、エシユロスはそう信じ切っていた。

†

「で、これはなんなのかな？」

エシユロスが調理を始め二時間後。

起きてダイニングに遣って来るなりに齎された薫の第一声がそれであった。

分厚い黒縁眼鏡の向こう側に映るテーブル。見下ろすは鎮座する二つの皿に乗ったもの。

「……何処からどう見ても、オムレットだ」

そう答えるエシユロスの声は消沈し切っていた。

それもその筈――

「どこからどう見ても、“タタリ神”にしか見えないんだけど？」

料理が失敗していたからだ。

炭化した卵と調味料の混合物。それらがまるで無数の蚯蚓のような塊と化した様はまさしく“タタリ神”であった。

「面目ない……」

申し訳なさそうに顔を伏せるエシユロス。

薫は寝起きでいつもよりも癖が強くなっている髪を撫で、殆ど無意識にリトルシガーに火を点ける。

そして、枕元から持ってきたシガーケースと血赤色のオイルライターを置き席に着くと煙を吐いた。

「まあ、人の料理の技量をとやかく言うつもりはないよ。でも、なんで料理なんて？」

吹きかけるつもりは無くとも、紫煙がエシユロスを纏った。

エシユロスは自分が料理をするまでに至った経緯を話した。

「嗚呼、成程。私が料理出来ないと思ったのと、自分の立場を情けなく思ったと。そういうことだったんだね」

薫はテーブルに置かれた灰皿に手を伸ばし、灰を折った。

リトルシガーはフィルターこそあれど分類上は紙巻煙草ではなく葉巻である。普通、紙巻の煙草は灰を落としながら吸うが、葉巻はそ

うではない。灰を折りながら吸うのである。

「エシユロス、一つ勘違いしているみたいだけど私料理できるよ?」

「そうなのか?」

半信半疑のエシユロスに対して、薫はコクリと小さく頷いた。

「今でずつと一人だったから。自分の為に何かを作るとというのが面倒だね。料理にも楽しさを感じなかったし」

証拠に昼は作って見せようか? と薫は笑ってみせた。

「でもだからといって、外食や出来合いばかりでは体に悪いんじゃないのか?」

「承知の上だけれどね。実のところ、長生きにはあまり興味はないんだ」

薫の言葉にエシユロスは顔を曇らせる。

——長生きに興味がない。恰好を付けているわけでも、強がっているわけでもない。本心からの言葉であった。

だからエシユロスは理解出来ない。誰だつて死ぬのは嫌な筈だ。それが故に長生きを望むのも当然の帰結だ。なのに、彼女は興味がないと本気で言っている。

困惑するエシユロスに、薫は煙交じりの溜息を吐いた。

「でも、私が長生きしてくれないと君的には困るっていうのは理解出来るよ。魔物の王を決める戦いつていうのが、実際どれくらいの間で蹴りが付くものなのか分からないんだし。だったら私に残された未来は長い方が良いつてこともね」

そうではないと、エシユロスは言い掛けて、口を噤んだ。

次の口上が思い浮かばなかったから。

「うん。だったらこれからは料理をすることにするよ。あまり好きではないけどね」

微笑み返す薫の言葉に、

「……そ、そうか。なんというか、すまないな」

エシユロスは恐縮した。

すると薫は、

「それ、良くない」

エシユロスを指差して言った。

「え？」

呆けるエシユロスを気にもせず、薫は吸い終った煙草を灰皿に置く。

「君は私を助けてくれた。何をする必要もなく。それだけで此処にいる理由にはなるんだ。だから気を遣ったりしないで、堂々ここにいれば良いんだ」

薫は微笑み、テーブルの向かい側まで身を乗り出して、エシユロスの頭を撫でた。

——……嗚呼。

熱い。肉の裏側に火が点ったかのように。エシユロスは頬に火照りを覚える。

その正体は分からないが、今は薫の目を見ない方が良いと判断して顔を背けると、

「……オムレット、片づけるぞ」

と誤魔化す様に言った。

すると、

「待ってよ」

薫がそれを静止した。

何をするのか？

エシユロスがそう思う間もなく、薫はフォークとナイフを手に取って、混沌と化したオムレットと名付けられた廃棄物を食べ始めた。

「カオル?！」

バリボリととても卵料理から発せられているとは思えない咀嚼音を発しながら、薫はそれを食べ進めていく。

「うん、美味しい」

「そんなわけないだろ！ 無理しなくて良いから止めるんだ」

エシユロスが無理矢理皿を取り上げようとすると、薫は皿を遠ざける。

「おい！」

「折角エシユロスが私の為に作ってくれたものだし。誰かに料理を

作って貰うなんて初めてのことだから。全部食べたいんだ」

それに、と続いた。

「一生懸命な気持ちってというのは裏切らないよ？　ちゃんと美味しいから」

笑顔でそう言い切られてしまっただけは、最早エシユロスに成す術はなかった。

エシユロスは、観念したかのような苦笑を浮かべる。

「もし良かったら、それも私に出来ないだろうか？」

薫が向かいの席に置かれたオムレツもどきに目を遣ったので、エシユロスは急いで席に腰かけ、

「厭だ」

と返して自らが生み出してしまったダークマターにナイフを通した。

ゴリツ、メリツと轟音を立てながら、黒い物質は一口大にカットされていく。

「エシユロス？」

「食事は一人で食べるより誰かと食べたほうが美味しい。セオリーだろう？」

エシユロスのぶつきらぼうな言葉に、薫は自然と顔を綻ばせた。

ガリつとフォークを突き立て、エシユロスは料理を口に運ぶ。

「マズッ！」

と短い悲鳴が響いたのはその直後であった……。

LEVEL 9：薫の料理

「だあああああッ！ 糞！ なんだこの如月何某とかいう女性（ひと）は！ 一体何がそんなに気に入らないというんだ！」

朝食が終わって暫く後、薫の部屋のリビング。

エシユロスは苛立ちのあまり手に持ったゲームのコントローラーを床に投げ付け、髪を滅茶苦茶に振り乱して絶叫した。

原因は手持ち無沙汰のあまりに始めた薫のゲームにある。簡単に言ってしまうと人間界に降りたって日が浅く、ゲームのゲの字も分からない常態には非常に度し難い難易度に知らず知らずのうちにチャレンジしていたのだ。

奮闘すること約三時間。

エシユロスの目に映るゲーム画面は全く好転する気配を見せない為に、文字通り、彼は投げ出したのだ。

無力。あまりにも遠く遠く及ばずの到達点。

薫に対し、容易く片付けてみせると啖呵を切ったことすら最早遠い過去にすら感じられ、遂にエシユロスは床に倒れ、天井を仰ぎ見る。

あまり遠くない筈の天井さえも今のエシユロスには遥か彼方にあるかのように見えた。

今、昼食の買い出しに行つた薫が帰ってきたらどんな風に詰られるのだろうか。ゲームの状況が好転しない中出て行つたから、屹度、そこから一歩たりとも進んでいないことを囁かれるのだろう。

と、エシユロスの中で負の方向性へ思考が連鎖していた時――。

「ただいま」

部屋の主の帰りを告げる声が届いた。

だが、併し、エシユロスはそれにも、近づいてくる足音にもまるで反応を示さなかった。

「如何したのエシユロス？」

リビングに着くなり、薫の目に留まるのは当然、敗北に打ちひしがれるエシユロスである。

「嗚呼、カオルか……。私は駄目だ。女性一人、如何としてやることも

出来ない……駄目な男なんだ……」

薫が見てきた中で、エシユロスが最も弱った瞬間であった。

一体何事だろうと思っていると、ふとゲーム画面が目映った。

「ああ、そうか。千早スパイラル抜けなかったか」

薫は総てを察し、エシユロスの前にしやがむ。

「エシユロス、顔を上げて。落ち込まないで」

「カオル……」

体を持ち上げ、薫を見つめるエシユロスの瞳は心做しか潤んでい
る。

「む?」

薫は違和感を覚える。

エシユロスではなく、自分の内側に。それに敢えて名前を付けるな
らば“時化”であろうか。そぞろに波打つて、一向に止む気配はな
い。

それを起こしているものの正体は、薫には分からず、

「……えっと、ね。エシユロスに起こったことはこのゲームを初めて
やる人にはありがちなことだから。特段、エシユロスが下手くそつて
わけじゃないんだ」

誤魔化すかのように、慰めの言葉を継いだ。

「本当なのか?」

「こんなことで嘘言わないって」

薫は苦笑しつつ、エシユロスの頭を撫でた。

「……頭を撫でるな」

エシユロスは頬を膨れさせる。

子ども扱いされることに対する、ほんの小さな不満を発露させ。

「慰めのつもりなんだけどね」

そういう所が子どもなのだということを屹度、エシユロスはまだ気
が付かないだろうと薫は顔を綻ばせる。

「うん、そうだね。これが気に入らないなら別な物を今から用意する
よ。と、言ってもこれも立派な代物ではないのだけれど」

そう言つて、彼女が見せつけた物は、幾らか丸みを帯びたビニルの

袋であつた。

†

「ほう……」

エシユロスはテーブルに座ると薫が作った珈琲に舌鼓を打ち、脱力しきつた声を上げた。

そして、見つめる先はキッチン。

リズムカルに包丁を鳴らす、薫の後ろ姿。

——矢張り、この姿は慣れない。

焦げ茶色の目立たないデザインのジャージ。地味で垢抜けないその恰好は薫には似つかわしくないように、エシユロスには感じられた。

「如何したの、エシユロス？」

視線に気が付いて振り向く薫を見ても、その感想を変えることは無かった。

作り物めいた美貌の中に、顔の三分の一は覆い尽くす大きさの黒縁眼鏡が妙に浮いていて——着ている赤と黄色のボーダー柄のエプロンがまるで似合わない。

「なんでもない、続けてくれ」

そう言つてエシユロスは、言葉として出かかっていた感想を珈琲と一緒に喉の奥へと流し込む。

「そっか」

エシユロスの言葉に納得し、薫はまた調理へと戻つた。

薫の手つきを見ながら、エシユロスは魔界時代に思いを馳せる。

彼が暮らしていた家には大きな厨房があり、何人かの料理人もいた。エシユロスにはそんな料理人たちと比べても、薫の腕前にはなんら遜色はないように見えた。

——それなのに、“料理が楽しくない”か……。

何かで高い力を持つのなら、自然とそちらに興味が向く。興味が少しでも向けばいつの間にか楽しくなっているものだ——というのがエシユロスの持論だ。

故に薫が料理をすることを楽しめないという事実、今一共感が出

来ない。

——カオルは、如何して料理を好きになれないのだろうか？

そんなことをぼんやりと考え乍ら、知らず知らずのうちに、エシユロスはぼんやりと転寝をしていた。

「エシユロス、出来たよ」

掛けられた声にびくりと身を震わせ、エシユロスは目を覚まし、そこで自分が寝ていたことに気が付く。

「ああ、もう出来たのか……お疲れ、カオル」

目を擦り、欠伸をしながら、エシユロスは薫にねぎらいの言葉を掛ける。

その時、半睡の意識の中に、チーズと黒胡椒の香りが割り込んだ。はつきりと目を開けると、それはどうやら「麺類」のようであった。クリームソースと粉チーズがかかっており、中央にポーチドエッグが乗っている。

立ち上る湯気が、エシユロスの頬を舐める。

「どういたしまして」

そう礼を言いながら、薫はエシユロスの前に皿を置く。

「カオル、この料理はなんというんだ？」

エシユロスが知る限り、魔界には目の前にあるものと似た料理は無かった。

「『カルボナーラ』。私のなかでこれが一番綺麗に出来る料理だからこれにしたのだけど……最初に好みを聞いておくべきだったね。チーズとか苦手じゃない？」

「いや、問題ない。とても美味そうだ」

弾む声色で答えるエシユロスに、薫は嬉し気な、柔らかい笑みを浮かべる。

そして、自分の分のカルボナーラと、珈琲、そして二人分の食器（カトラリー）を並べると、

「さ、食べようか」

とエシユロスに食べるように促して、手を合わせた。

エシユロスもそれに続ける。

「いただきます」

エシユロスは覚えた。日本の食事前の不文律を終わると、パスタをフォークで巻き上げまず一口。

併し――

「あ……れ……う？」

エシユロスははたと手を止めた。

妙な違和感に襲われる。不味いわけではない。口に合わないというのとも違う。寧ろ、味に関しては言うことはない。

ただ、〃冷たい〃のだ。無論、湯気が上がるような料理が温度的な意味合いで冷たい筈もない。けれど、エシユロスには〃冷たい〃ように感じられた。

まるで、食べること以外の何かに腐心しているかのような不自然さを感じるのだ。

薄気味が悪い。心の底から空しさが押し寄せてくる。

徐々に、徐々に、エシユロスの顔は蒼白になっていく。

カルボナーラにこれでもかというほどタバスコをぶちまける薫の姿だけが異様に、スローモーションに瞳に映る。

「どうしたの？ 髪でも入ってた？」

あからさまに気分を悪くしているエシユロスに薫はそう訊ねた。

「い、いや……」

「言つとくけど、髪が入ってたとしてもワザとじゃないから。実際、そういうことをやる人がいるっていうのは事実だけど、私はそうじゃないし、私にとってエシユロスはそうじゃないから」

一切の無表情でそう語る薫の言葉はエシユロスの耳には届かず、また届いたとしてもその意味の半分も理解出来なかっただろう。

「エシユロス？」

「い、いや。ああ、そうだな。うん、そうだ」

「あからさまに怯えているね……若しかして、本気で私がそういう人だって思ってる？」

無論、〃そういう人〃というのがエシユロスには分からなかったのだ。

「そういう人というのは？」

と素直に訊ねる。

すると、

「恍けるな。下手か、君は」

と薫に切り捨てられる。

エシユロスからすれば理不尽極まりない。

「だから、つまり。私が料理に髪だの血だの入れるようなメンヘラだと思っっているのかなど。そういうことを言いたい」

「メンヘラとはなんだ？」

「俗に精神疾患及び精神障害を患っていること。またそれを患っている人のこと。以上、『三省堂スーパー大辞林3.0』より」

日本語とは面容なり。

エシユロスはそう感心しながらも疑問を呈する。

「だが、自分の体の一部を料理に入れることに何の意味があるんだ？」

薫は珈琲を一口啜ると、

「一体化、とか？」

と答える。

「一体化？」

「人間の体は当然、食べ物で出来ているでしょ？ 当然体を形作るのは食べ物なわけだ」

「詰まり、相手の体の一部を食べるとは、そのまま自分の体の一部になるということ？」

薫がコクリと頷いたのを受けて、エシユロスは吐き気を催し、口を押さえる。

「人間の体は一年もあれば大体総てが入れ替わるようになるらしいから。一年も同棲して、相手の口に入るもの全てに自分の血でも入れれば、それは最早“一緒”になったと同じことだってわけだね」

「だ、だからってそんなこと実行する輩がいるのか？」

涼しい顔で言っただけの薫に対し、エシユロスは最早吐瀉寸前であつた。

だが、無情。薫は、そんなエシユロスに止めを刺す。

「いる」

たった一言で。

「私の同僚の、『エリー』って娘（こ）なんだけどね。彼氏が出来るたんびそんなことばっかやる子で」

「し、しかも知り合い……」

「なりたくってなったんじゃないよ。正直、ああいうアウトローとは関わりあいたくないんだけどね。理解は出来るけど、共感は出来ないし」

食事中にも関わらず、薫は煙草に火を点け、吸い始める。

煙草の味と料理の味が混ざり合い、舌の中が不味くならないかと心配するエシユロスをよそに、

「二つになりたかったらセックスっていう方法がある——とも思うしね」

薫が途轍もない爆弾を投げつけた。

「な……な、な、何を言っているんだ貴女は!!」

「顔、赤いけどどうしたの?」

「なんでもない!」

そういつて、飲みかけの珈琲を一気に飲み干すエシユロスを尻目に薫は口元から煙を吐きながらにやつく。

無論、エシユロスの動揺の理由など承知の上だ。

もしエシユロスの年齢が見た目通りならば人間の子であれば思春期である。その時分の子供である。そういったことに興味があるのは人も魔物も変わらないのではないのだろうか。

薫のそんな考えは結果正しかったのである。

事実、エシユロスは耳まで真っ赤にして薫と顔を会せようとしな
い。

——楽しくなってきたな。

薫は自分がどんな表情をしているのか、心配になった。心象がしっかり現れているのならば、屹度酷く見つとも無い笑みを浮かべているのだろうから。

その心の儘に、

「興味あるの？」

薫はエシユロスを押搦い続ける。

「そ、それは……」

あからさまに顔を下に向け、ズボンの裾を強く握る姿は羞恥に震えている様に見えた。

薫は身を乗り出し、エシユロスの顎に手を当てて、顔を持ち上げる。目の端に僅かに雫が溜まっていた。

悪い熱に浮されているかのように、顔は真っ赤であった。

——嗚呼、嗚呼、嗚呼……。

——堪らない、堪らない、堪らない、堪らない。

——心臓が熱く、千切れるように切なく、壊れる程に甘く。

キイイイイイン——……。

何処からか金属音のような奇々怪々な高音が遣って来る。

ぐるり、ぐるり、ぐるりと景色が歪む。

——あれ、甘い？

——なんだ、それは？

そう思った瞬間、薫の目に映る世界の歪みは元に戻り、目の前にはエシユロスの顔があった。

ニタリと薫は唇を吊り上げた。

どく、どく、どく、どく。

途方もなく、気道が詰まるくらい、心臓が高鳴って、競り上がって。「私とする？」

気が付けば、薫はそんなことを口にしていた。

瞳には、不安気で、今にも壊れそうなエシユロスの面様がある。

暫しの沈黙が流れる。

何かを言おうとするも、エシユロスの口からは音が生じない。薫も薫で頭の中が白濁し、ただ呆けるだけである。

「カオル！」

「冗談だよ」

漸くエシユロスが声を絞り出した時、薫はおどけたような口調でそう言って席に戻る。

「……へ？」

エシユロスから出てきた声は驚く程に間抜けであった。

薫はそれを見てせせら笑いながら、煙草を吹かす。

「君の反応が面白いからね。つい揶揄ってしまいたくなった」

「なんだそれは！」

文字通り怒髪天を衝くといった勢いで、エシユロスはが鳴る。

「うん、思ったんだけど君は少し“うろたえない”とか“余裕を持つ”だとかいうことを覚えた方が良いと思うんだ」

紫煙交じりの嘆息と共に薫はカルボナーラにフオークを突き立て巻いていく。

「何故私が悪いという体になっている!? どう考えても貴女が十割悪いだろう！ というかまず謝ってくれ！ 本気だと思つたじゃないか！ 一寸怖かつたぞ！」

あははと乾いた笑みを立てると、薫は一口カルボナーラをつまむ。

「それは悪かつたね。ごめんさい。でも、私にはシヨタコンなんて趣味はないから。全く以て本気ではないのでこれは安心して」

片手に持った煙草の吸殻を灰皿に置きながら薫はそう語った。

「シヨタコン？ なんだそれは？」

「性愛の対象を少年に求める心理に名付けられる俗称。または、性愛の対象として少年を取り扱う作品や、その心理を抱く人のことを指す。横山光輝作の漫画『鉄人28号』に登場する少年『金田正太郎』が由来とされ、正しくは正太郎コンプレックスという。以上、『三省堂スーパー大辞林3.0』より」

「……要は児童性愛のことか」

「うん。だからまあ、これから誘われることがあつたとしてもその場合は冗談なので落ち着いて、堂々と、鼻で笑うくらいの強さを持つべきだね」

「その前に『揶揄わないこと』を心掛けたらどうなんだ？」

フフフと薫は笑い、エシユロスの言葉を無視してパスタに集中し始めた。

「この畜生……」

エシユロスは額に青筋を立てる。

が、どうあつても口では勝負にならないのが目に見えている為、その怒りは目の前の麺にぶつけることにした。

畢竟、やけ食いに近い。

小さな苛立ちに囚われて、当初感じていた違和感はすっかり忘れ去られてしまっていた。

†

昼を食べ終わると、薫は赤いカクテルドレスと薄い化粧、幾つかのアクセサリーを纏い仕事へと赴く準備をすると、

「行ってくるね、エシユロス」

と皿洗いをしていたエシユロスに声をかけた。

「ああ、仕事、頑張ってきてくれ」

なんの飾り気もなく、エシユロスはエールの言葉を送る。

そこを微笑ましく思いながら、薫はお気に入りの赤いハイヒールに足を通そうとした。

すると、

「そうだ、カオル」

と呼び止められる。

「何？ エシユロス」

薫は靴ベラを使いながらハイヒールに足を入れながら聞き返す。

「夕食はどうすれば良い？」

その問いに、ああと気が在るのだから、無いのだから曖昧模倣な相槌を薫は打った。

彼女の勤務時間は昼の一時から夜の九時である。

だが、九時に上がったとしても家に着いてから調理を始めると実際食べ始めるのは恐らく十時。

まだ子供であるエシユロスにとってはあまりにも遅い夕食になってしまう。

「悪いけど、夜だけはコンビニで買うか、どっか食べに行くかしてくれ

ないかな？」

「了解した」

「ありがとう。お金は靴箱のところに置いていくから」

薫は財布から福沢諭吉を召喚し、靴箱の上に置く。そして、そこに置かれた鍵を持って駐車場へと急ぐ。

極めて余談であるが、彼女はバイク通勤である。

「行つてきます」

そうエシユロスに改めて挨拶を残し、薫は帰国後初めての仕事へと急いだ。

薫がいなくなり静まり返った部屋の中。皿洗いを終えたエシユロスは、家中の灰皿の中身を片付け始める。

いついかなる時も煙草を吸う為か、薫の住まいは各部屋に灰皿が置いてある。玄関やトイレにもである。

また、その殆どがほぼ山盛りになっている状態であった為、エシユロスは見かねて掃除を始めたというわけだ。

そして、そこから魔界に居た頃習慣となっていた筋力トレーニングをこなしそれすら終えて一時間が経過した頃――

「まずい、暇だ」

エシユロスは手持ち無沙汰に見舞われた。

魔界に居た頃はチエスを趣味にしていたものだが、当然相手がいないとやれない上、魔界と人間界では駒の名称や動き方に差異がある可能性もあり手軽に出来るものでもない。脳内詰めチエス（プロブレム）という彼にとつて常套の時間つぶしがあるが、途轍もなく退屈なのでその考えは打ち消す。

ゲームをやるうにも、件のゲームは暫くやる気にはなれない。今なら如月何某の顔を見ただけでもコントローラーを投げつける可能性すらある。

ならば、薫に勧められたアニメか映画のDVDでも見ようかと思つたところで。

「そうだ」

妙案が浮かび、エシユロスは玄関へと向かう。

そして、薫が置いていった一万円札を手にとると、
「もう一度料理をしよう！」

と高らかに宣言した。

——斯くて叛逆の狼煙は上げられる。

LEVEL10：魔物少年エシユロ☆お兄ちゃんー叛逆の物語ー【前篇】

JR 鬼松駅。

鬼松市の市民が何処かに遊びに出掛けるとなると、この駅前が主になる。百貨店、デパート、大手家電量販店、飲食店などが多く集まっているからだ。

その為、バスターミナルでもある駅前には常に行き交う人で賑わいを見せる。

駅自体も八階建てのショッピングモールになっており、鬼松の若者たちの人気のスポットである。

エシユロスの『叛逆』はその八階から始まる。

——中々広いな。

いざ出発点に立ってみると、エシユロスは感嘆の声を漏らした。ほう、と。

本屋であった。八階にあるのではなく、八階が本屋なのだ。広い空間は、背の高い本棚に埋め尽くされ、漫画や小説、実用書や雑誌などが数多に見られる。

以前薫に本を買える場所はと訊ね、帰って来た答えが此処であった。

覚えておいて良かったとエシユロスは切に思う。

——お蔭で薫に、料理を振る舞うことが出来るのだから。

エシユロスは考えた。如何して自分が失敗をしたのかを。

語るに及ばず。料理について基礎すら知らなかったからである。

ではそんなエシユロスが取るべき道は？ 至極単純、基礎を覚えるである。

エシユロスはその基礎を本から学び取ろうとしているのである。

——『料理』……。『料理』……。

早速、料理の基礎を扱った本を探そうと、エシユロスは棚に張られたプレート上の文字を確認しながら、店の中を練り歩く。

こういつた本屋というものは、出版社の名前や、扱う分野ごとに棚が別れているのが常であるが、エシユロスには区分けする文字を読むのでさえ一苦労であった。

魔界と人間界では当然使用される言語は違う。魔本が翻訳機（トランスレーター）の役割を果たす為、余程魔本から離れない限り「話す」ことに関して不自由はしない。但し、「読み書き」となると別だ。個人で覚える必要性がある。

先ほどエシユロスは薫から借りたゲームで平仮名と片仮名だけは何んとか覚えたが、漢字となると小学生低学年程度までが限界である。

現にエシユロスは歩いている中で、哲学の「哲」と、「経済」という文字の読み方が分からなかった。

なんとか、「料理」に関連した書籍の棚までたどり着きエシユロスは本を探す。

日本語が多少出来る程度、料理がまるで出来ない自分に選べる自身に選べるラインナップ。狭すぎる選択肢からそれでも手に取った本を見て、エシユロスは顔を引きつらせる。

五歳ほどの少女がレードルを片手に満面の笑みを見せつける——
そういった構図の雑誌であった。タイトルは「ひとりのできるから！」。

エシユロスは察した。これが幼児向けの本であるということ。

途端に顔に熱を覚えるエシユロス。だが、これも総ては「叛逆」の為である。負けっぱなしなど、エシユロスの主義ではなかった。

湧き上がる羞恥心を押し殺しそれを持ってレジに向かおうとしたその時、

「ねえ」

エシユロスは後ろから声を掛けられる。

振り返るとそこにはワンピース姿の少女が立っていた。歳の頃は、エシユロスの手の中に在る料理本の表紙の少女と同じだろうか。

おさげ髪が印象的なその少女は、クリツとした大きな瞳を潤ませエシユロスを見つめてきた。

「えつと……。何かな、お嬢さん？」

エシユロスは、見ず知らずの少女に声を掛けられたことに困惑しながら、それでも笑顔を向ける。

「お兄ちゃん、その本買うの？」

「そうだが？」

何気なく言葉を返したエシユロスは次の瞬間、驚愕することになる。

少女がエシユロスの手の中にある“ひとりのできるから！”を掠め取ろうとしたのだ。

当然、エシユロスはそれに対抗する。

年齢、背格好、男女の性差、そして何より歴然とした“魔物”と“人間”という種の違い。

少女に勝てる是非も無し。

けれど、少女は諦めず、尚も本を引っ張り続ける。

「一つお尋ねして良いか？ お嬢さん？」

魔物の腕力で本を破いてしまわぬように気を配りながらも、エシユロスは少女に訊ねる。

「なに、お兄ちゃん」

ギギと歯が鳴る程、少女は食いしぼる。

「如何してこの本が欲しいんだ？」

「進一くんにお料理、作ってあげたいの」

友達か、はたまた片想いの相手か。

後者の可能性が高いかと、エシユロスはそう勘ぐる。

「如何して、その進一くんとやりに料理を作ってやりたいんだ？」

「進一くん、最近元気ないの。おいしいもの食べれば元気になるから」

野次馬根性でつい少女に訊ねてしまった自分にエシユロスが気付いたのは、言葉を発するより後であった。

併し、知ってしまった以上は仕方ないと、エシユロスは本から手を離した。

「え？」

「君に譲る」

「良いの？」

「勿論」

エシユロスは柔らかな笑みを湛えた。

まだ幼い女子の、純粹な優しさを踏み躪る様な真似はエシユロスには出来ない。

女は花だ。幾ら幼子と云えど、それは変わらない。

「でも、お兄ちゃんもお料理……」

「私は良いんだ」

微笑みを残し、エシユロスはさっさと少女の元を立ち去ろうとした。

その時――

「あのー！」

店内に少女の声が響き渡った。

†

エシユロスが叛逆の真つ只中にいる頃。

「ただいま」

薫は帰宅していた。

家を出てから一時間も経たずして、である。

それも仕事場に到着するなり、店の無期限休業というとんでもない連絡を受け取ってしまったからだ。

然も、店長を介してではなく、珍しく店に顔を見せた経営者のダンの口から直接だ。

少しばかりそれが気掛かりとなった薫であったが、ダンから渡されたあるものの所為で直ぐにどうでもよくなった。

そのあるものを、一番見せてやりたい人に早く見せたい気持ちが逸った儘に、薫はリビングのドアを開けた。

「エシユロス。君の戸籍が漸く出来たよ」

そのあるものとは、ずばりエシユロスの戸籍であった。

実際、薫の手に握られているのは、エシユロスの顔写真が張り付けられた個人番号カードとパスポートであるが戸籍と言い換えても問

題はないだろう。

人間界で戸籍を持たないエシユロスの為に戸籍を見繕させることをダンに確約させ約三日。

ロシア人と日本人のハーフ、《慈島理暉》の戸籍を手に入れ、晴れてエシユロスの扱いは人間となったのだ。

これで人間界での行動上の不自由がある程度緩和される。

だが、併し、帰ってくる筈の喜びの声は無かった。

リビングにも、ダイニングにも、エシユロスの姿が見当たらない。

「どこに言ったんだらう？」

そう呟き薫は他の部屋も探しに行くが、トイレにも、寝室にも、物置と化したもう一つの部屋にも矢張り彼の姿は無かった。

寝室の枕元に、黄褐の魔本が別冊マーガレットと並んで置いてあるのが確認できた為、取りあえず自分の元を人知れず離れようとした訳ではないことだけは理解し、薫は再びリビングに戻る。

そして、椅子に腰かけ、テレビを点けると、ほぼ反射的に煙草を口に銜え、火を灯した。

重い溜息のような氣息と共に立ち上る牡蠣色の烟を見つめ、薫はぼんやりと呟く。

「エシユロス、どこ行っただらう？」

叛逆の物語になど、思い至る筈もなかった。

†

逆らうということは、痛いということと同義語である。

自分の無力に対する叛乱の場合などは特に。

「痛ッ！」

現に今、エシユロスの指には痛みが走っている。

滴る血の赤が、不銹鋼の刃の銀灰色によく映える。

「エシユお兄ちゃん、気を付けて。手はネコさんだよ」

「面目ない」

隣に立つ少女——名を木下美蘭（きのしたはるらん）という——に窘められ、エシユロスは面目なさそうに苦笑し、涙目になりながら流血する指を吸った。

——叛逆は始まっていた。

エシユロスは美蘭の家でカレー作りに励んでいた。

そして、今しがたジャガイモの芽を落とそうとしたらしめやかに指先から出血と相成ったわけである。

しかし、一体如何してつい先ほど知り合った少女とエシユロスは料理をすることになってしまったのか。それは美蘭なりの優しさであった。

エシユロスも料理作りがしたい。美蘭も料理作りがしたい。故に二人は共通の料理本が欲しい。ならば一緒に作ればいい。

凡そそのような理論展開となり、エシユロスは成すが儘、美蘭の家に行くことになった。

エシユロス達が買い物をしていた駅からほど近い、所謂「団地」の五階。古びたコンクリートの建物からは想像がつかない程には、手狭乍ら綺麗な部屋が、美蘭の住まいであった。

部屋に着くまで、そして着いて料理を始めてから、美蘭は色々なことをエシユロスに話した。両親と三人暮らしであるが、二人とも仕事をしていて忙しく、少しばかり寂しい思いをしていること。けれど、そんな両親が大好きなこと。

そして、「進一くん」という人物についても。

『いつも遊んでくれる優しいお兄さん』

美蘭の弁を借りるならば、進一はそういう人物であった。

畢竟、彼女の面倒を両親の代わりに見てくれている隣人である。絵が上手く、料理上手の、明るい青年。彼女はそんな進一のことを、両親を思うのと同じくらいに愛していた。だが、ある日を境に突然進一が遊んでくれなくなってしまった。部屋を訪ねても、出て来てさえくれない。偶々見かければ、どこか元気がない様子——とのことだった。

「ところで美蘭。進一くんは如何して元気がなくなってしまったんだ？」

ソファに座り美蘭に治療を受けながら、エシユロスはふとそんなことを訊ねてみた。

「おねえさんとけんかしちゃったからだと思う」

「お姉さん？」

「きれいなおねえさん。進一くんとね、おててつないでなかよしなの。でもその人、みなくなっちゃった。そしたら、進一くん元気なくなつた」

「見なくなったって、進一くんの所に来なくなったということか？」

小さく美蘭は頷いた。

「だからね、けんかしちゃったんだと思ったの」

「そうか……」

気が付くと、エシユロスの親指には絆創膏が巻かれていた。

エシユロスは考える。屹度、少女の言うように喧嘩などではないのだろうと。

手を繋いでいた仲良しのお姉さん——詰りは進一の恋人であろう。如何いった事情かは分からないが、恐らく進一とその女性は別れることになり、それが進一の心象に大きな傷を与えた。

そういうことなのではないか——と。

無論、そのお姉さんがただの血縁なのかもしれないが、美蘭の話に因れば進一はコックとして働いているらしいから自立した身といえる。人間界と魔界での労働可能な年齢はそれぞれ地域差もあるが凡そ十五歳前後。果たして、そのような年齢で血縁と手を繋ぐのか。況してや男が、である。

「エシユ兄ちゃん？」

エシユロスは美蘭に呼び掛けられ、つい熟考に入ってしまったことに気が付いた。

「ああ、一寸考えごとをしていた。治療、有難う。上手だな、美蘭。良いお嫁さんになれるぜ？」

頭を優しく撫でられると、美蘭は少しだけ顔を赤くした。

えへへへと顔を緩める美蘭を、エシユロスは見守るように微笑する。

「……あと、これは完全に私の予想だが。多分、進一くんは元気になるぞ」

「本当!?!」

弾んだような声がエシユロスに返って来た。

「ああ、本当だ。優しい君がその為だけに作る料理。それを食べて元気ならないわけがない」

確信は、ない。

もし進一の抱えるものが失恋の痛みだとするならば、子供が作った料理くらいで晴れるわけがないとすら思う。

それでも、小さな子供を、花を、踏みつけて平気な顔が出来るようにはエシユロスは育ってきていなかったから。

つい嘘を吐いてしまった。

決して小さくはない罪悪感が、心臓に針で刺されたような痛みを伝える。

「さあ、そろそろ料理の続きをやろうか。進一くんが待つてるぜ」

それを誤魔化す様に、エシユロスはソファから立ち上がり美蘭に呼び掛ける。

「うん。でも、指切らないでね」

自信満々に腕を捲るエシユロスを、心配そうな微笑みで見つめ、美蘭も続けて立ち上がった。

LEVEL 11：魔法少年エシユ☆兄ちゃんく叛逆の物語【後篇】

結局、エシユロスは十本全ての指に絆創膏を巻くことになった。

「エシユ兄ちゃん、大丈夫？」

隣に立つ美蘭が心配そうに訊ねた。

「ああ、安心してくれ。『男子三日会わざれば括目して見よ』と、この国では言うのだろうか？ この程度の掠り傷、男にとっては直ぐ治るものさ」

傷を見せながらも、エシユロスは豪快に笑い飛ばす。

ところで、『男子三日会わざれば括目して見よ』とは元々『士三日なれば括目して相對すべし』といい、男というのものは少しの間にも見違えるほど成長しているという意味である。

併し、エシユロスにとっては指を切った傷など直ぐに治るというのも事実だ。

普通人間でも包丁の怪我程度であれば三日はいらぬが、エシユロスの場合は、絆創膏を巻いたその瞬間には完治していた。

エシユロスに限らず、魔物という存在は人間に比べて傷の治りが圧倒的に速いのだ。

「それよりも、料理が完成したんだ。先ずはそれだろう」

——故に怪我などという些細なことは棚上げするに然る。

それよりも重大事は、料理である。

二人の目の前にある鍋の中には、見た目にも美しいカレーがあった。

湯気と共に遣って来る香りは、はしたないと理解していても、否応なく口内に唾液を溜め込ませる。

「美味しそうだね」

「ああ。だが、味見をしなければ。本当に美味いかはまだ分からんぞ」
然う——二人の戦いはまだ終わらない。

食べさせたい者に対し、食べさせられると断じられるものが出来て

いなければ、二人は戦いに勝ったと言えないのだから。
「いくぞ」

「うん」

二人は匙を握りしめカレーを掬い上げ、口へと運ぶ。
永遠のような、短い沈黙の後――

「勝ったぞ、カオル。この戦い、我々の勝利だ！」

エシユロスの口は、勝利の凱歌を上げていた。

「おいしいー！」

美蘭も頬を蕩けさせる。

美蘭にとつての初めての料理は、エシユロスにとつての叛逆の物語は此処に確かな成果を上げたのだった。

「良かったな！　これで進一くんを元気に出来るぞ！」

「うん！　ありがとうエシユ兄ちゃん」

手を取り、二人は喜びを分かち合った。

「ところで、一つ良いか？」

「なあに、お兄ちゃん？」

「これ、半分貰っても構わないか？」

鍋を指差し、エシユロスは訊ねた。

「いいよ！　でも、どうして？」

その問いにエシユロスは有りの儘を答える。

「君と同じだ。大切な人に食べさせたいんだよ」

大切な人である。

魔界の王の候補生にとつて、本の持ち主とは。

「そうなんだ。じゃあ、はんぶんあげるね」

エシユロスが魔物であるという事実を知らない美蘭はただ無邪気に笑う。

「有難う」

少女の優しさを微笑ましく思い、エシユロスは表情を和らげた。

少しばかりの、嘘を交えていることに対する後ろめたさなど、何処かに吹き飛んでいた。

「それでね、カレーはあげるから。ねえ！　早く進一くんのところこ

！ ねっ！

そんなエシユロスの手を掴み、美蘭は急かす。

幼い懇情は、けれども余りに大きくそこにとどめる事は出来ず。

分かった分かったと、エシユロスは緩やかな困り顔を浮かべてみせて、鍋を持つ。それを見るや否や、勢いよく駆け出していく美蘭ののたりとした歩調でエシユロスは追いかけた。

目的の場所は隣の部屋ということもあり、一分とかからなかった。

「秋山」と丸い書体とパステルカラーに因って書かれた木で出来た手作りの表札が、家主の細やかで穏やかな性格を窺わせる。

まず、美蘭が、

「進くん、はるらんだよ」

と声を掛け、扉を叩く。返事はない。

次にエシユロスはインターフォンを鳴らしてみた。矢張り、応答はなく。

そして、無礼だと思いつつもノブをがちやがちやと鳴らしてみたが、鍵がかかっているようだった。

「進くん、るすかなあ？」

美蘭は顔を俯かせる。

「どうだろう……居留守という可能性もあるが……」

対してエシユロスは顎に手を当て、神妙な面持ちでそう返した。

「いるすってなあに？」

「本当は家の中にいるのに居ないように装うことだ」

エシユロスの何気なしの回答は、美蘭の表情を曇らせた。

「如何したんだい、美蘭？」

予期せぬ少女の悲し気な顔に、エシユロスは戸惑う。

「……進くん、わたしのこと嫌いになったのかな？」

「えっ？」

「嫌いなひとには会いたくないから。だから、会ってくれないんだよね？」

俯き、今にも泣き出してしまうような声で絞り出された答えに、エシユロスは返答に窮した。

そうではないのは明白だが、まだ幼い美蘭に分かることなのか。進一が姿を見せない理由。極限にまで打ちひしがれるということの意味。そんな弱い姿を誰にも見せたくないという、男の詰まらない意地も。

——恋に破れる、その痛みも。

「……まさか」

そこまで考えが巡り、エシユロスは目を見張った。今思いついてしまったこと。進一に起こった最悪の事態を予想して。

そんなことは無い筈だと、脳幹の奥から遣って来るビジョンを蹴散らしながら、エシユロスは固く目を閉じる。

そして、目を開けると、

「畜生っ……!」

忌々し気に毒づいた。

「すまない、美蘭。この鍋持ってくれ! 金属部分には触れるなよ」

「ほえ!? エシユ兄ちゃんどうしたの?」

突然鍋を押し付けられ、美蘭は頓狂な声を上げる。

「あと一つ頼みたい。少し私から離れてくれ」

「え!? どうして?」

「良いから疾（はや）く!」

言い知れぬ威圧感に気おされ、美蘭は震えながら後退った。それを確認するとエシユロスは、

「きえあああッ!」

と雄叫びを上げ、扉に目掛けて思い切り拳を振り抜く。

剛! と爆音が鳴り響き、辺りに木っ端が舞った。

木で出来た扉にはエシユロスの腕が突き刺さっている。

「ええええ!! エシユ兄ちゃん!! ドア壊したら怒られるよ!」

エシユロスがしたことに、動揺し、美蘭は声を張り上げる。

だが、エシユロスは

「誰がするかは知らんが、説教ならいくらでも聞いてやる!」
と強い語気で言い返す。

そして、手を動かしながら、扉の向こう側に在る、見えていない鍵の位置を探る。

暫く後、ごっつ、と金属の擦れる鈍い音がした。

「……よし、開いたか」

それを聞くとエシユロスは腕を抜いてドアノブに手を伸ばした。

一気に進一の部屋に押し入ろうとして、ふと足を止め、美蘭の方を振り、

「美蘭、絶対に入って来るんじゃないぞ！」

そう釘を刺した。

†

エシユロスが扉を壊してまで、進一の部屋に押し入った理由。

それは、進一の人命に関わると判断したからだ。

女に捨てられ、打ちひしがれた男は一体何をするだろうか？

答えは明白、“分からない”である。

A m a n t e s a m e n t e s——愛する者に正気無しというラテン語の格言であるが、魔界にもそれに類する諺がある。

深愛に囚われた物は、人間であれ魔物であれ、狂気そのものなのである。

例えば、オペラという括りの中でもかなりの知名度を持つカルメン。全霊を向けた愛を裏切った女、“カルメン”を、最終的に“ドン・ホセ”は殺してしまう。

またフランスの叙事詩、狂えるオルランドの“オルランド”は恋に破れ、諸国を裸のまま放浪した。

白い手のイゾルデは女か虎かの選択を迫られ、喜んで虎を選んだ。愛ゆえならば、殺害も、狂乱も、倒錯も、なんでもありだ。

理解不能か？ 当然だろう。素面の儘、理解出来てしまえる狂気など狂気とは言わない。

名状可能に翻訳された、その名前を張り付けたそれらしい何かでしかない。

とどのつまり愛する人にとっては、何もかも自ら命を絶つことも在り得ない話ではないわけである。

無論、それだけを根拠にエシユロスはあのような暴挙に出たわけではない。

進一が部屋の中で死んでいる可能性に思い至ってエシユロスはまですやったこと。

それは、扉の向こう側にある、生きている人間の気配を手繰ることである。

魔界でそのような訓練も受けていた為に——エシユロスは魔物や人間の気配をある程度の距離であれば辿ることが出来る。

厳しい訓練の末に得た力は、扉一枚隔てた程度の距離ならば息をするより容易くことを成し遂げる。

結果は、部屋の中には生きている人間の気配を僅かに感ぜられた、である。

人の気配があるならば万事良し、というワケではない。寧ろ、無いならばまだ単純に留守という可能性だっただけであった。僅かにあるというのは大問題なのだ。

玄関から部屋まで、如何見積もっても十メートルが精々。そんな近距離に人がいるならば、その気配は強く感じられなければならないのだ。

それが微弱になつていくということが何を意味するのか。

否応なく想像出来た為に、エシユロスは扉が締まり、美蘭の顔が見えなくなつてから舌を打った。

「まったく……死体だったら無視したんだがな……」

靴を脱ぎ、素足で廊下をべたりべたりと踏みつけ乍ら、エシユロスは毒づく。

可愛らしい花は血の色を知らない方が良い。屹度若し、腐臭の一辺でも感じたならばエシユロスは美蘭の知らない所で部屋を焼くくらいはやってみせただろう。

だが、恋に破れ、自棄になり死にそうな男なら別だ。

そんな代物、死体以上に、麗しい乙女の目に触れるに値しない。

鼻を擽る様な甘酸っぱい匂いの先。六畳程度のフローリング。美蘭の瞳に相応しくない男が確かにそこいた。

締め切ったカーテンの隙間から、辛うじて光が漏れるような薄暗い部屋の窓際であった。

平素、巖のような、と表現すべき屈強な肉体を持った男が硝子に首をもたれていた。

平素と前置いたのは、憔悴し、寝れていたから。

幾夜も寝ずに泣き続けたのであろうか。目が赤く、瞼も腫れ、眼下が黒ずみ、頬には塩の跡が残っている。

目からは光が失せ、何処か遠いところを見ているようでありながら、屹度何処も見えてはいないのだろうと想像できる。

指先に在る、擦り切れ吸われぬまま、灰がぼたぼたと落ちる煙草が物悲しい。

煙は、薫の吸っているものと違い甘い匂いがした。先程から嗅いでいた匂いと同じだったので、エシユロスはああそうかと納得すると、

「貴様、秋山進一か？」

まるで煙以上の関心事ではないかのような、心底如何でも良さげな声色で、目の前の男に問う。

「……そうだけど」

のたりと首を擡げ、時が止まったかのような間の後に、男——秋山進一は答えた。

「君は誰？ どうやって入ったの？」

「それを貴様が知る必要はない」

エシユロスは当然の疑問をも並べて突っ撥ねる。

「有無は言わさん。理由も話さん。兎に角貴様を病院に連れていく」

そう言つてエシユロスは進一の腕を掴もうとした。

だが、

「止めてくれ！」

エシユロスの手は、凡そ弱つた人間とは思えない剛力に跳ね退けられる。

慮外な反応。

エシユロスは啞然とした。

「誰だか知らないけどほつといてくれ！ 今は一人になりたいんだよ

！」

進一はそう怒鳴り散らし、顔を膝に埋める。

瞬間、ぶちりと、エシユロスの中で何かが千切れ、

「ほぎけー」

理性で判断するより遙かに速い本能が、進一の顔につま先をねじ込んでいた。

「うがつ……」

顔面を鮮血で真っ赤に染め上げ、進一は短く呻く。

「にやいしゆるゆんだ!? (何するんだ!?)」

「五月蠅い、黙れ意気地なしめが！ そんなんだから女に逃げられるんだ！」

顔を押しさえ抗議する進一の胸倉を掴み、エシユロスは思い切り怒鳴りつける。

「貴様を心配して、態々料理の腕を振るってくれた可憐な乙女がいるんだ！ だのに、いつまでもウジウジしやがって！ 手前が蛆以下だと思えんか!?!」

進一は知らないこと。けれど、エシユロスは知っていること。あまりに知り過ぎてしまったこと。

どれだけ、美蘭が頑張って料理をしていたか。どれほど、進一のことを心配していたか。

——進一の笑顔を、一等心待ちにしていたか。

理不尽だとは百も承知だ。けれど、思えばこそ怒らずにはいられなかったのだ。

「……知るかよ、そんなこと」

だが、その思いは進一には伝わらず。

それがまたエシユロスを苛立たせた。ギリギリと歯軋りし、そしてフンと鼻を鳴らす。

「だったら、もう知らん！ 勝手に死ね！ 美蘭の知らん所で、腐ってしまえ！」

そう吐き捨て、エシユロスは身を翻した。

その直ぐ後だった。その言動総てを、後悔することになったのは。

ボトリと、何か固く重たいものが落ちる音がした。それは鍋であった。フローリングに中身のカレーが少しばかり飛び散っていた。

そして、その先を見上げると――

「エシユ兄ちゃん、なにしてるの?」

そこには、美蘭がいた。

「如何して……入って来るなど、言ったのに」

いてはいけない筈なのに。

「なんで進一くん、けがしてるの? 進一くんのこといじめたの?」

「いや、違う。違うんだ、美蘭」

そう言いつつも、何も違う所などなかった。

エシユロスが進一を傷つけたことは、動かさざる事実である。

「どうして進一くんのこといじめたの? 進一くんを元気にしたいっていったのに!」

まくしたてられ、エシユロスは何も言い返すことが出来なかった。

美蘭にとって、進一が大切な存在であることは分かっていた筈なのに。進一を傷つけてしまったから。

「エシユ兄ちゃんのバカ! 大っ嫌い!」

自分を謗り、逃げていく美蘭を、エシユロスは引き留めなかった。

そうされて当然だと思っただから。

――ただ、胸が酷く締め付けられる狂おしい痛みを感じたのは疑いない事実ではあった。

+

「ただいま」

薫が暇を持て余し、珈琲割りでテキーラの瓶を三本ほど空にした頃であった。エシユロスが帰宅を告げたのは。

「おかえり」

何処か張りのない声に気が付きながらも、薫は至って自然な調子で声を返した。

案の定、リビング迄遣って来たエシユロスは顔を伏せ、落ち込んでいる様子だった。

手に持った鍋が気になったので薫は、

「それ、何？」

とまず訊ねた。

そして、続いて、

「今まで、何処にいたの？」
と。

「この鍋はカレーだ。何処にいたかは聞かないで欲しい。何があったのかも……」

今迄にないほど、エシユロスは自信というものを喪失しているように、薫には感じられた。

何があったかは分からない。ただ、エシユロスにとっては辛い出来事であったのだろうと思い、

「そっか」

と薫はそれだけ言って、それ以上を詮索しないようにした。

「ところで、さっきまでお酒を飲んでいただけだけど。その所為かとてもお腹が減っているんだ。それを食べても良いだろうか？」

「……嗚呼、構わない」

何処までも暗く、覇気のない声でそう言って、エシユロスはふらふらとした歩調で台所に向かう。

鍋を火にかけ、カレーが煮えると、皿に米と一緒に盛り付けた。

「どうぞ」

出来上がったものを薫に振る舞う。

薫は一口、スプーンをつついた。そして、

「うん、美味しい」

と微笑して答えた。

エシユロスにとっては一番欲しかった感想であった筈なのに。今は、それすら辛く感じてしまう。知らず知らずのうちに、悲痛に顔を歪めていた。

すると、薫は黙ってエシユロスの頭に手を置いた。

「頑張ったね。偉いぞ、エシユロス」

料理に対するねぎらいか。それとも、辛い目にあつたであろうエシユロスに対する同情か。

いずれにしても、エシユロスはそれを情けなく思い——自分を甚く恥じた。

「そんなに辛そうな顔をしないでよ。私って、君にとってその程度み
たいじゃないか」

「すまない……」

「そういうのやめようよ。正直、自信を無くした君は、私が辛くなるん
だ」

薫はそう言いながら、煙草に火を灯した。

深い、紫煙交じりの吐息の後——

「……君がちよつとでも明るくなれるように。明日、私のお気に入り
の場所に行こうか？」

薫はそんな提案をしていた。

「……貴女を知れるならそれは嬉しいことだと言わざるを得ないが。
でも、良いのか？ 貴女、仕事があるだろう？」

「それは良いんだ。暫く仕事、休みだから」

齎された意外な回答に、エシユロスは苦笑を浮かべる。

「休んでばかりだな、貴女は」

「仕方ないよ。ダンさんが休みだって言うんだから」

嘆息交じりの白煙がエシユロスの周りを漂った。

幕間2 天使の塵とニムロド

果てしなく哭く風の響き。岸壁の巖を削る潮騒。遠く聞こえる鷗の声。

そんな音を耳にしながら、和装の魔物、江戸紫の少女アヤメはゆつくりと目を開く。

「なあ、リッチ」

そして、まず隣に立つ本の持ち主であるリッチに話しかける。

「如何した、アヤメ？」

隣に視線を遣ることなく、リッチは聞き返した。

「網い、かかったで」

クスリ、と愉快気に笑声を上げるアヤメに、

「そうか」

とリッチは素っ気なく言葉を返した。

「まさか、こないなに早うことが運ぶなん思わどへんかったわ」

「それで、どっちに掛ったんだ？」

「ハイド、とかいう子の方やね」

「成程、風の取り人の」

彼等にしか分からない会話を続ける二人の間を、

「あの……」

と別の声が挟んだ。

若く少しばかりか細かいかもしれない女性の声である。

その持ち主は、プラチナブロンドの線が細い白人の女性であった。服装は水色の着流しめいた服装——畢竟するに病衣であるため、病人か怪我人であることは明白だ。

事実、彼女はつい数十分前までは病院の個室の中でベッドに横たわっていた。ある事件に巻き込まれた所為で。

併し、今彼女がいるのは病院ではない。

見えるのは何処までも広がる青い海と、遠く広がる蒼穹とその中の入道雲。風が少しだけ五月蠅く聞こえ、波音を鳴らす水面は遙かに下に見える。

——岸壁の上であつた。

「こんな所まで呼んで。一体私に何の用ですか？」

此処に呼びつけたのは、絶壁に立つリッチであつた。

事件のことで、貴女にだけ話したいことがある。連邦捜査局のバツジと共にそう告げられて、この場所に連れられて来たのだ。

「ああ、そうだった」

まるで、ついぞ忘れていたかのように、リッチは右手の拳を左の掌に打ち付けた。

「——所で、貴女は日本のサスペンスドラマを知っているかね？」

「は？」

一聴する限りではまるで関係のない質問に、女性は困惑した。

「あの国のサスペンスドラマには種明かしは崖の上という変わった不文律があつてね」

「それがなんだと言うんですか？」

その問いに、リッチは柔和な笑みを以て答える。

「貴女を態々こんな場所まで連れ出した理由は、然ういうことだと言いたいんだ。今、この瞬間、私はエイイチロウ・フナコシというわけさ」

リッチの言葉を女性はまるで理解出来ないでいた。それも其の筈であろう。此処はアメリカの西海岸だ。日本の俳優、船越英一郎を知っている人の方がマイノリティであつた。

「さて、与太話もほどほどにして本題に移ろうか。然う、君が遭つた事件について。つい先ほど決まったことを」

と、その前にと前置いて、リッチはアヤメに手を差し伸べた。

クスリ。

短く噛い、アヤメは振袖の袖口から江戸紫色の本を取り出して、それをリッチに渡す。

そして、リッチは本を開き、

「『エムグルジオ』」

と刻み込むようなねつとりとした口調で唱えた。

なんだ、と女が疑問に思う暇もなく——

「え……う？ な、何コレ？ 体から火が、火が……。あ、ああ、アアアアアア!!」

女性の体が炎に包まれる。

煌々と立ち上る火柱。

何が起きたのか、女性にはまるで分からなかった。

自分をFBIだと語る男が訳の分からない言語を発したと思いきや、急に体が燃えたのだ。

魔法だと思えない。

否、それ以上に。

熱い、熱い、熱い。

死ぬ。死んでしまう。

女の頭脳を支配していたのはそれであった。

「然う、君は大学の講義を終えて宿舎に帰宅する途中何者かに襲われ、気を絶し入院することになった。その際に、何かの薬品を嗅がされたようだから其の為の検査も兼ねてだ」

立ち上る火柱と阿鼻叫喚を見ても、リッチは淡々とした口調で前後関係を整理する。

「——だが、残念なことにその検査の過程でとんでもないものが見つかってしまった。未確認の細菌。そして未知の死病だよ」

「なッ……！」

火焰の中で、ぎよろりと目が見開かれた。

「すぐさま研究者による調査が行われたが感染力が高く、現在の医学では手の施しようがないようですね。そこで決まったのが、君ごと加熱処理をするというやり方さ」

至って涼しい顔で、リッチは淡々と告げた。

一方、女性の顔には炎で黒ずみかけていても分かる程、絶望が満ちていた。

「あ……あ、あ、あ……イヤアアアア……」

告げられた事実を打ち消す様に、女性は首を何度も振った。

併し、無情。リッチの口は現実をはつきりとした言葉で伝える。

「受け入れ難いだろうが、誰も君が生きる事を赦さなかった——然う

いうことだ」

ついに火達磨のまま女は崩れ落ちる。

「イヤ……イヤ……イヤアア……」

言葉の紡げる限り泣き崩れて。

けれど、炎は止まらず、やがって言葉は止まり。

炎も止んで、最後は灰だけが残り、それすら風に乗って、消えた。

それを見送ってリッチは十字を切る。

「I'm sorry — for your loss」

その様を見て、アヤメはクスクスと笑った。

「ホンマ、酷いなアリッチは。あないな嘘お吐いて。泥棒んなるよ?」

「言いがかりは止してくれ。私は嘘など吐いていなだろう」

その言葉にアヤメは嘆息を漏らした。

「そらあそうかもしれないけど。でも、いっちゃん大事んところ話したら

んやろ? 嘘お吐いとるのと変わらんわ」

リッチが女性に話したことは全て本当であった。

未知の細菌、不治の死病。

その感染者、総ての焼却処分も話し合われ、途中まで実行されよ

うとしていたことである。

併し、その先をリッチは女性に話さなかった。

「ホンマはわくちんちゅうんもとつくに出おこしやすいて、あん病院

ん人らに配られとったんにね」

然う、未知の病気に対する治療法はその後、すぐに発見されたのだ。

「しかもそれ作ったんはリッチやのに」

クスクスとせせら笑い、アヤメはリッチの瞳を見つめる。

黄金螺旋のような、何処まで深淵に続く波紋を描くいと暗き瞳を。

それを閉じて、リッチは嘆息する。

「認めよう。其れ等総て、君の話した通りだ。だが、アヤメ、一緒くた

にしてはいけなйдらう。嘘吐きと言葉足らずは別に定義付けられ

るべきだ」

それにと、付け加えリッチはアヤメに微笑みかけた。

「美しかっただろう? 世界に見捨てられる悲劇というものも」

ニタリ。

少女の顔に、逆さまの三日月が生じた。

「せやね。辛うて、甘うて、どろどろん真つ黒で、綺麗やったわ」
くるり、くるり、くるり——。

アヤメは舞い踊る。風になってしまった、絶望に変わり果ててしまった女のいた、黒い痕跡を踏みつぶしながら。

その様を見て、リッチは顔を覆い、クツクツと含み笑う。

「然り。絶望とはウオツカのように辛く、マシユマロのように甘く——そして、恋する乙女のように、美しいものだ」

そう語るリッチに対し、アヤメはうんうんと何度も頷いた。

「せやねえ。でも、ウチ、楽しいことや綺麗なモンやったらみんな好きよ?」

せやから——と、アヤメは後ろで手を組んで、身を乗り出す。

「ウチ、もおっと、もおっと、色んなモンが見たい」

屹度、意識してやったのならば、あざといという謗りは免れない格好であろう。

だが、アヤメの振る舞いは至って自然体である。

「でな、そろそろ話してくれへん?」

その仕草でリッチに訊ねた。

「リッチ言うたやろ? “心”んありかを探しに行くて。ウチ、そこがどないに綺麗なんか知りたいねん。そんでな、リッチの仕掛けた網いいうんがどないな風に関わるんか、教えて欲しいんよ」

そうだ。

ずつとずつとずつとずつと——。

リッチはこの「神の試練」に当たって下準備をしていた。

アヤメと共に、戦いが始まる二年も前から。

時折、今し方のような遊戯を楽しみながら、待つて、待つて、待つて——。

そして、遂に獅子が壺に残った最後の毒に、否、蠱毒と共に旅に出る時が来たのである。

一体どのような答えが返って来るか、蠱毒の紫は心を弾ませ待ちわ

びる。

「仮説、そして実験」

然して、獅子の口から齎されたのはそのような言葉であった。

「〃心とは脳内物質の分泌、その発露である〃。それを仮に〃在処〃
だとして、歩んでみようと思う」

「若し、それが違ってたら？」

「山を目指していて、砂漠に着いたとしても――。見た瞬間、素晴らし
いと思うだろうか？」

「確かにね。でも、出来たら、目指しとるところに着きたいさかい、道標
がいるなあ」

「それならあるさ」

「どんな？」

質問に一拍置いて、リッチは口を開く。

「そこで先程言った実験さ」

「実験かあ。中身知ったらつまらんくなる？」

「恐らくは」

「やったら名前だけ教えてえな」

「名前か」

予期せぬ問いに、リッチは顎に手をやり、暫し考える。

命名の必要性などないと考えていた。だが、よく考えれば、生まれ
堕ちて、役割を与えられた以上、名前を持たなければいけないだろう。

名前がないのは可哀想だ。リッチはそう思い、

「〃天使の塵とニムロド〃……そう呼んでいる」

実験に名を授けた。

「〃天使〃ってなんなん？」

「そうか、君は天使を知らないのか」

青天の霹靂である。

魔界には天使の概念がないのか。それとも、あってもアヤメには知
る術がなかったのか。

その〃答え〃は出なかった。

故にリッチは悩む。

どう説明すれば、良いか。何を説明して、何を説明せざるべきか。少し考えて、リツチは自分がそれについて知っている事の総てを話すべきだろうと考えた。

「では、説明しよう……少し長くなる。何処か腰を落ち着けられる場所に行こう。何か食べたいものはあるか？」

うーんと、アヤメは唸ると、

「きんつば」

と小さな声で答えた。

困ったように、リツチは頭を掻いた。

「中々、米国（ここ）に在って難しい注文を付けてくれるな。まあ、良い。金鰐を食べられるところを探そうか」

「ようかんでもええよ？」

「難易度が変わってないぞ」

ほのぼのと話しながら二人は歩き出した。

からん、ころんと、下駄の鳴る音だけが、優しい風の中へと消えていく。